

刻翻
『春城日誌』(二六)

——『双魚堂日誌』大正六年一月～七月——

春城日誌研究会

市島は一月に恒例の熱海へ行き、坪内逍遙を訪ねたり、同じく熱海に滞在の早稲田大学教授の内ヶ崎作三郎、井上辰九郎等と清遊し、十日程して帰京した。

このように年初を静かに過ごした市島であるが、この年は彼自身と早稲田大学にとって常でない波瀾の一年となったのである。いわゆる「早稲田騒動」が起り、学内が大きくゆれ動き、社会的にも影響を与えるなど、終息後も大きな爪跡を残した事件だった。

また、市島の関与している日清印刷株式会社に於いても、社長の渡辺八太郎の更迭問題が起きている。二月二十二日に前島密邸に重役が会し、秋に行なわれる十周年記念式の終了後に渡辺社長の処分を決めるとの合意があった。

五月末に東五軒町に元旗本の家屋を四百坪の土地付で購入し転居した。これは、前から雪夫人が希望していたことであった。このため、市島の常日頃買求めていた書画骨董を処分し、費用の一部に当てている。その額は、日誌や後の回想録『春城八十年の覚書』（早稲田大学図書館編刊・一九六〇年）によると三万円を越えたものだったようである。購入費用の大半をこれで賄ったのであるから、『覚書』でいう「自分は長い生活に、金銭を貯蓄する習慣がなく、長い間、銀行とは無交渉であった。余裕があれば、図書や書画を購ふて、其の目録をみて、宛がら蓄財家が、貯金の通

帳を披ひてニコニコすると一般であつた。此の図書や書画を売つたのが、前後十万円にも上り、それに由つて、土地や家屋を購ふことが出来た」と回想しているとおりだった。

市島は相変わらず校務等で多忙にしていた。三月には大日本文明協会のために大阪に出張した。旅先で市島はロシア革命を知るが、日誌には「新聞紙露皇儲の薨去を伝ふ」とのみ記されている。四月には図書館協会の全国大会があつた。そして、新居の登記を五月二十五日に済まし、翌日家族と共に検分に訪れた。二十八日から家具等を運び込んだが、翌日には大阪出張（文明協会維持員の拡大、早稲田大学講義録の販路拡大、校外生集会を主催）に赴いている。その上、新居に附属する長屋の借家人が立退かず、市島一家が移つてきても居続けた。前の持主に督促をしてもらうなど、この一件が解決したとの報を、市島は大阪にて受けた。

また、二月に大隈重信が皇室から長年の功績に対して天盃を受けたのを祝つて東京での祝宴（大隈邸での園遊会、二千人出席）が執り行われたが、この三月に大隈は故郷の佐賀に展墓のため訪れ、途中大阪でも六月二日に天盃拝受の祝宴を催した。これに近畿の校友七百名が大阪ホテルに集つた。市島もこれに加わつた。

五日に帰京、「宅の整理未成らず。家具狼藉、出発當時を異ならず」と不満げだったが、「今夜始めて新居ニ臥す」と記し、「夜分の閑静宛然西京ニ在るか如し」としているから、新居に満足だったようだ。六月十五日に、内藤久寛（日石社長）、増田義一（主婦の友社社長）等経済人を、翌十六日に、大隈信常（重信義嗣子）、高田、坪内、浮田和民等早稲田大学関係者を招いて新居披露の宴を催した。

二月二十六日に宗家主人市島徳次郎が京都で胃癌のため逝去した。急を聞いて京都に赴くが、臨終に間に合わなかった。徳次郎は、新潟豪農市島家の十一世で湖月と号し、新潟県選出の第一期貴族院議員であり、第四銀行の初代頭取を務めた人だった。京都で火葬に付し、遺骨は継嗣の徳厚（初之丞、この年の四月二十九日に改名）により故郷

に運ばれた。三月八日に今の新発田市天王にある宗家等で葬儀が執り行われた。市島もこれに列席、六日から十二日まで新潟に滞在した。親戚筋の佐藤友右衛門（水原の地主、貴族院議員、衆議院議員）、高頭仁兵衛（長岡近郊の庄屋家系、日本山岳会第二代会長）、牧口義方（柏崎近郊の豪農、衆議院議員）、の外、建部逯吾（東大教授）、宮島二郎（弁護士）、等が参列した葬儀であった。

この後、市島は、九日に新潟に出て定宿の篠田に投宿、松井郡治（校友、弁護士、後に衆議院議員）、高橋義彦（吉田東伍の弟）、石塚三郎（歯科医、後衆議院議員）等の知友から老舗割烹鍋茶屋で慰労の宴を催してもらった。市島が再建に力を注いだ新潟新報社を訪れ、社員に講話をした後、おなじ鍋茶屋で接待を受けた。加えて、この夜の宴である。新潟在住の校友も次々と訪れた。酒宴続きで「多く飲むに能はず」としながらも、こう記している。「帰宿後、宿酔を医せんとて多く飲み十二時^ニ到り臥す。新潟の如き酒郷久しく留まるを不可」

宗家主人徳次郎は、何くれとなく筆頭分家角市家を支えてくれた人であり、かつて衆議院議員であり、早稲田大学理事、日本図書館協会会長等文化人として市島を、一族の長老格として遇していた。哀悼の念と共に、誘われて北海道旅行をしたこと、市島が心血を注いで宗家跡取として育てようとした徳次郎の次男清松（明治三十年に東京専門学校に入学するが、結核に罹患、二十八歳で逝去）の事を想い、酒盃を手離すことが出来なかったのだろうか。

前年、大隈伯後援会会長として、衆議院選挙に臨み、激烈なる選挙戦の結果、大隈与党に大勝利を齎した市島であったが、その折も選挙が終った日から、政治的なことからは一切逃避したと思われる行動をしていたことは既に触れた。この年、四月二十日に第十六回総選挙が行なわれた。市島の政治に距離を置く姿勢は、この時も徹底していた。大隈重信から子飼の永井柳太郎（金沢選挙区）の参謀を命じられるが、これを婉曲に回避している。また、投票日当日は、

「故ありて投票場に行かずして已む」という事であつた。ただ、二十一日の選挙結果を知つた市島は、「余の多少力の致したる三木武吉、紫安新九郎共ニ当選す」と記すのである。三木は校友で東京選挙区、紫安は大阪から当選した。

二月十七日に、高田早苗が大隈伯後援会の理念を引継ぐ憲政済美会の名譽賛助員に市島に就任して欲しいと要請してきたのに対し、これを諾したにもかかわらず十九日の会合には欠席した。このことを捉えてみても、市島にとり政治は我事にあらずという徹底した心境になっていたのであろう。

「早稲田騒動」は、早稲田大学にとり未曾有の大事件であつた。高田が大隈内閣の総辭職により文相を辞めた事が発端であつた。(市島の日記は、大正六年の日記は、例年に倍する量にのぼる。そのために、今回は紀要編集委員会に依頼し、二回に分けて掲載して貰うこととした。)

この事に関しての大正六年の初見は、二月七日である。「午後、高田宅ニ秘密会を開らき、学長の進退問題を凝議す。坪内と余の外塩沢(昌貞)、両田中(田中穂積、田中唯一郎)出席す」とある。(括弧は編者補、以下同)八月に任期が切れる天野為之学長の留任問題を議したものと見られる。この頃天野を更迭することは表面化していなかったようだ。五月六日に、高田邸に坪内と共に訪れ、学校幹部について重要会議(市島はこの三人をして早稲田大学元老會議と称している)を開き「結局、高田を総長とし、内閣交迭」已む無しという結論を得たという。

この考えが表面化したのは六月二十日である。『万朝報』等が、「高田氏早大学長復帰の陰謀」が企てられていると報じたことによる。市島は、その三日前の十七日に「高田宅ニ学長交迭の件ニ付坪内、浮田、金子(馬治)外三理事(塩沢、田中穂積、田中唯一郎)と会し、結局高田の再起を決し、十一時浮田、坪内と共に大隈侯を訪ふて右の次第を報告」とあり、翌十八日に天野学長を訪ねて、この事を決定として伝えている。天野の反応に就いては記していない。そし

て、新聞紙上に「陰謀」として載った。『早稲田大学百年史』（第二巻）では「鉄筆版」と称される文書が、十九日に都内の新聞社に「早稲田大学校友有志」名で届けられ、『万朝報』等に載ったのであった。天野側から流されたものだった。

同日、新聞を見た高田等は、坪内、浮田、市島及び三理事と緊急会議を開く。そして、「高田の学長復職は、早稲田出身の代議士の切なる請求を容れて見合すこと、し、改革委員長と云ふ資格にて改革の衝ニ当らしめ、天野辞職の上は、塩沢就任の事ニ内定」としたとある。この形で推移することで、天野の任期満了を以って穏やかに終息させたい希望が市島等にあった。しかし、六月三十日に開催された維持員会で、「学校内紛ありと世間ニ謳はるゝその源泉と責任」について天野への忠告を高田よりなされた。市島も「天野ニ勧告する所あり。終ニ天野と余の間ニ激論」が交され、決定的な亀裂を生じてしまった。

加えて、当時早稲田大学を卒業して教員となっていた大山郁夫、村岡典嗣、服部嘉香、北吟吉、原口竹次郎等（恩賜館組と呼ばれた）グループが、大学改革案「プロテストメント」を以って改革を求めていた。彼等は、七月七日、市島に面会を求め、「天野の再任は学校を亡ぼす者」と天野への不信を明らかにした。

この紛擾は、早稲田出身の政治家、多くの校友を巻き込んだ。大隈重信の斡旋にも拘わらず、天野は再任を求めて運動を行なう。そうした態度への反感は浮田、坪内の維持員辞任表明を生む。七月二十三日に天野は国府津の別荘に滞在中の高田を訪れ、引続き学長として改革の主導権握ることを主張するが、高田は情勢は天野側に理あらずと説くと、顔色を変えて忽々に退去したと、市島に電話をしてきた。

この頃、反天野の強硬論「硬論」と妥協を説く「軟論」とがあったとされる。強硬派からは、維持員会において天野罷免処分決議をすべしとの意見もあった。市島もそれに組する立場であったようだが、坂本三郎、三木武吉等か

ら定款に学長解職の明文なしとの具申も踏まえ、八月末の天野学長の任期終了まで待ち収束させることになった。

二〇〇八・一〇・二七 金子記

(春城日誌研究会 金子宏二、酒井清、松井叶子、渡部照子)

追記 昨年四月に新潟の豪農市島宗家十二世徳厚氏の

夫人である市島信様のご逝去された。享年九八歳だった。信様は、ご自身の所有される東京都文京区千駄木の邸宅を五百坪余の土地ごと早稲田大学に寄贈するという遺言を遺された。市島春城以来の縁を思つてのことであつた。筆者は、一〇年余の交流を通じて、大家の夫人としての威厳に加えて、日舞の名取、若き頃にアメリカ生活をしていることから来る広い見識に教わるどころが多かつた。ご冥福を祈るとともに、寄贈される優れた文化財でもある日本建築が大学により有効活用されることを、このことに少なからず関つた者として切望したい。



大正6年5月に購入した東五軒町の家の庭
この年の秋に、母に贈るため、石塚三郎に撮影してもらつた内の一枚。敷地は400坪余、庭には池もあったが、余りにも広く見えることについて、市島は「此写真を見ると植物園の庭でも見る様で、幾万坪もあるやうに見へるが、実はそうでない。写真は実は写真でないことがこれでもわかる」と記している。〔「酒前茶後録」巻二〕

特別
イ 4
1919
571

双魚堂日誌

大正六年
一月以降

双魚堂日誌

大正六年一月以降

一月

元旦

晴。今朝、愛犬ニ起され六時起床。夜未だ明けず。点燈、祝杯を挙げ、例のことく雑煮を喰ふ。感冒漸く薄らきたるも全愈ニ到らず。閉居、客を迎ふも面倒、人を訪ふは尚面倒なり。児昂と共に九時落合の荘ニ到り、富岳を拝し、一、二の事を処し、正午帰宅。各地よりの賀章堆を

なして到る。」(二オ) 一々答ふるニ備し。近年、形式の書状を発するを已む。今年も自筆の賀状五十枚ほど発して已む。明日熱海へ行くことに決し、樋口旅館へ電報を發す。新年例のことく興を感せず。唯た平日より來客なく静閑なるか何寄りなり。新服を着けたる気分も可也。在石川金沢寺島元重より鴨を贈らる。

二日

昨夜三時頃より雨、雪と変し今朝積むこと三、四寸、尚降りつゝく。十時家を發し」(二ウ) 十一時五分国府津行汽車ニ投す。熱海ニ赴かんとするなり。車中巖谷小波の大磯ニ赴むくニ会し談話ニ時を移す。一時半国府津着、直ニ電車ニ移る。小田原ニ二時着。例ニ依り輕便鉄道満員にて乗る能はず。二時間後れ切符を求めながら又乗る能はず。余、会社の重役を威嚇す。而かも乗車を得ずして一時間半後れて漸く乗車。熱海ニ達すれば既ニ八時也。此混雜の為、余の毛布所在を弁せず。熱海宿は例の如く樋口屋也。小田原より東京宅へ書状を發す。」(二オ) 在熱海別荘坪内へ鴨とからすみを贈る。

三日

晴、風。感冒未愈す。咳嗽甚し。朝餐後、坪内逍遙を訪ふて談話、正午ニ至り帰へる。井上辰九郎と話す。所在を失したる毛布漸く戻る。例の水晶屋、山陽の額を携へ来り鑑定を乞ふて去る。坪内より借受けたる二、三の圖書を読み半日籠居。二、三の絵はがきを児女ニ投す。旧臘来繁劇の爲筆を絶ちたる双魚堂」(ニウ) 日載を録し夜に入る。晩間同宿の守屋此助来室、淑談ニ時を移す。今夜、井上辰と洋館新食堂ニ晚餐を与にし、食後井上室ニ又飲み、十時寝ニ就く。

四日

晴、風。坪内逍遙を訪ふて、例のこたく十二時頃迄話す。副島八十六来訪。例の浄瑠璃談ニ時を移す。筆二本貰らひ受けて旅宿へかへり、東京丁西銀行并ニ増田義一ニ封書を発す。午後、西風ますく烈し。籠居、書」(三ウ) を読み且つ日載を録す。井上ニ誘はれて水晶屋ニ骨董を翫び終ニ竹の花瓶、熱海産楽焼片口、からもの梧桐盆等を購ふ。晩間渡辺千冬、小川平吉等と井上室ニ会し、書画

を観る。余より柳北成島翁の碑を前庭ニ建んことを提議し、一座の同意を得。

五日

晴。前日来の西風未やまず。熱海ニは珍らしき寒氣打つ、く。それが為風邪愈えず。咳嗽前日より甚し。九時より逍遙を訪ふ。逍遙、昨夜も睡眠を得ざりし」(三ウ) 由にて、今日余のためニ談すべき材料を工風せりとて手帳ニ書きつけたるを出し、三時間余り話す。皆な文学ニ関する逍遙自身の閱歴にて頗るおもしろく感したり。十二時辞して旅宿へかへる。午後、日載を録し時を費す。斎藤精輔来話。井上辰も来り俳諧談をなして去る。午後より西風収まり漸く暖を覚ふ。一浴一酔、守屋此助を其室ニ訪ふて話し、按摩を僦ふて早く寝る。

六日

「(四ウ)

晴、無風。早起一浴。朝餐後、逍遙を訪ふて例のこたく文学談ニ半日を消す。井上、東京ニかへる。午後籠居、筆硯ニ親しむ。家書到る。大鳥井弁三より来書。東京宅へ二、三の絵はかきを投す。谷崎潤一郎の小説神童を読

む。出版部へ簡して用件を申遣す。

七日

晴、風。昨夜来又々感冒の気味あり。殊ニ昨夜充分の睡眠を得さりしたため、今朝気分よろしからず。七草ニ付朝粥を喰ふ。消防出初式にて市中賑かなり。九(四ウ)時、例のことく逍遙を訪ひ、けふは余より二時間ほど続けざまに種々の雑談を試む。正午辞してかへり籠居、筆研ニ親しむ。家信に接す。内子へ書状を發す。平山堂へもはかきを出す。今夜、守屋と余の室ニ晩食を共にす。

八日

昨夜睡眠不足。朝来烈風、天地噪然たり。外出を見合はせ逍遙をも訪はず。十時逍遙訪ひ来る。雑談時を移し、正午洋館食堂ニ至り洋食を共にす。午後、内ヶ崎作三郎来(五オ)り同し宿ニ泊す。伴ふて逍遙を訪問し、夕刻迄語る。家信到る。昂、五日ジブテリーに罹りし処経過よしとの報あり。丹呉康平の書状を廻送し来る。内ヶ崎ニ聴けば目下長岡ニ在る高田半峰、病臥一時熱甚た高く漸く回復期ニ向ひつゝありと云ふ。見舞状を發す。

九日

晴。風邪依然たり。朝来筆研ニ親しみ、倦むて逍遙を訪ひ、互ひニ談笑、終ニ午餐の饗を受け、午後迄談話をつゝ、(五ウ)けてかへり、双魚堂日載を夕刻迄録す。内ヶ崎辞して東京へかへる。晩間、守屋と晩酌を共にし劇談時を移して臥す。

十日

晴、風。家信ニ接す。明日守屋と同伴帰京と決し、水晶屋を訪ふて骨董の払なし、家苞ニ乾魚、蒲鉾を調達す。九時より逍遙を訪ふて雑談、十二時ニ至り帰へる。又、筆研ニ親しむ。双魚堂日載全一冊録し了る。午後より平臥、小説を読む。夜に入り守屋と共に飲む。明朝同伴帰京を決す。(六オ)

十一日

晴。今朝出發ニ付坪内逍遙見送りニ来り物を贈らる。九時二十五分發輕便にて發す。車中谷崎潤一郎の小説を読み無聊を感せず。小田島(マ、原)ニ達す。直ニ電車ニ投し国府津着の上、守屋と共に飯す。出發ニ臨み偶々高田夫婦

の長岡より国府津の別荘へ来るニ会し、一札して別れ直ニ車ニ投し五時帰宅。児昂未だ愈へす。毎日發熱。吉田東伍より再版宴曲を贈らる。又、著者あり田中青山伯伝を贈ら」(六ウ)る。電話料并ニ国税払済。

十二日

晴。池水凍結寒氣甚し。坪内逍遙、小林文七、増田義一ニ書を投す。田中唯、内藤久寛ニ電話を通す。田中唯、校用にて来話。午後、小久江成一、日清印刷会社の件ニ付来話。長時間協議の後去る。終日家居。

十三日

晴。丁酉銀行八百円手形切替済、期限三月十日也。種村宗八、小林堅三、関太郎来訪。」(七オ)表具屋ニ四、五の書画巻帖を托す。大橋新太郎母の葬儀ニ代人を遣る。小田島、湯浅ニ書状を發す。夕刻より降雨。久振方にて頭髮を断る。真島桂次郎より寒氣見舞状到る。稲葉岩吉ニ書を發す。

十四日 日曜

晴。小林文七来訪。役者絵并芝居本五千円の価、壹割を

減することに談判纏まる。山田麟之助来訪、物を贈らる。在熱海道遙より来書。吉田半迂来り近作を示さる。十一時」(七ウ)みつを伴ふて浅草ニ散策、金田ニ飯し活動写真をのぞき帰宅。稲葉岩吉より上田恭輔著生殖器崇拜教之説一冊贈らる。即夜読了。

十五日

晴。阿部蘇春、井上辰九郎、小田島桂香、菊屋、木村大見交々来る。湯浅吉郎来訪、宸筆集を贈らる。長時間図書館の事を協議し、午餐を供して別る。小久江成一、毛利宮彦又来る。露都發片上伸の書状、桑港發埴原正直之郵書到達。羅氏出版の館藏六朝玉篇博文堂より」(ハオ)到達。真島桂次郎へ寒氣見舞状をさし出す。午後、客散して後、しばらく筆硯ニ親しむ。今夜、神樂坂末吉方ニ出版部の新年宴会を開らき、余席上一場の演説を試む。別室ニ小久江、渡辺兩人を招き、印刷会社事務上の件ニ付云々す。坂口五峰より「わらび」、石塚より梨菓、宇佐美尚より長岡饅頭を贈らる。又、毛利よりなら漬を贈らる。

十六日

晴。日清保険会社より昨年借入たる四千元ニ対し、当月より六ヶ月分之利子」(ハウ)百六十円也払済。高木を訪ふて物を購ひ、飯田町風月堂ニ飯し、昆田を古河会社ニ訪ふて井上辰より依頼之件を話し、内藤久寛を石油会社ニ訪ふて帰へる。坪内逍遙より来書。又、在台湾和泉文三より来書、病氣平愈之事を報し来る。

十七日

今朝チラ／＼降雪。微震あり。雪罷み又降る。平山堂を訪ふて物を漁る。火鉢を購ふてかへる。坪内逍遙より其著数作と演」(九オ)劇を贈らる。午餐ニ酒を飲み、寒を護す。逍遙ニ書を投ず。晩間、みつを携へて神田辺ニ散策、物を購ひ、今川小路風月ニ洋食を喫して帰へる。

十八日

朝来雨。内藤より使来り物を贈らる。表具屋を招き張交屏風の張替を依頼す。小久江成一、森脇美樹来訪。坂口五峰、午餐を共にす。南宗寺の玄嶺来り物を贈らる。夕刻より学校維持員新年宴会を兼ね富士見軒ニ会合す。余

も臨席」(九ウ)す。食後、学制案を協議す。

十九日

晴。稲葉岩吉、大鳥井弁三来訪。吉田半迂を招き事を托す。星野信之助、増田義一の書状を齎らし来り、一身上之事を云々す。田中稻城へ文部省依嘱の追加目録カードを為持遣る。昆田より朝鮮鶴の肉并ニ越後猪の肉を贈らる。午後、落合の荘ニ到る。庭中残雪あり。物を整理して直ニ帰へる。」(二〇オ)

二十日

晴。平石恒作来り物を贈らる。表具屋を招き、張り交書画帖の修覆を托す。内藤より依頼の忠魂碑排字を定むるため半迂を招致し半日を費す。午後出遊、神田辺ニ図書を購ふてかへる。上田万年の白石伝を読み夜に入る。京都下村正太郎より物を贈らる。直ニ晩酌之料とす。

二十一日

晴。今朝、田中唯一郎を訪ひ、又吉田東伍を訪ふ。栗林重三郎十七回忌ニ付法事の菓子」(二〇ウ)を贈り来る。内山省三、石塚三郎より来書。野本信治より鮭の飯ずし、

田中唯よりからすみ^(補)を贈らる。正午、児と外出。浅草ニ飯し活動写真を見て晩間帰宅。

二十二日

晴。内山省三、関太郎外一、二の訪客あり。十一時より印刷会社重役会ニ臨み、午後登校理事会ニ臨み、図書館ニ関する重要な件を協議し、登館事を処し、薄暮帰宅。」

(一オ)

二十三日

晴。関太郎、片岡玄嶺来る。内藤と電話にて新潟新聞復号之事を協議す。午後、高木を訪ふて紫泥の小山大急須を購ふ。栗林貞吉へ香を贈る。文明協会より三百円借入、明日村井銀行へ返金の為也。

二十四日

晴、風。大鳥居弃三来話。煙山専太郎、北令吉、亡山口医学博士遺書を学校ニ於て購入之件ニ付来話。坂口五峰来訪。多紀秀昭、幸田成友の紹介にて画幅を「(一ウ) 齋らし来る。村井銀行へ三百円返金。十一時より歴史参考図出版の件ニ付富士見軒ニ福原鐐二郎、高橋健自と会し

協議し且つ午餐を共にす。今夜、築地富貴樓ニ坂口五峰を招飲。

二十五日

晴。早朝大隈侯邸ニ到り、浮田博士を待合せ共ニ侯ニ謁す。文明協会の為めに侯の著述を需め、侯の快諾を得たり。侯より時局其他ニつき二時間ニ余る談論あり。十一時登館事務を処す。午後、維「(二オ) 持員会ニ臨み、三時高田半峰の病を訪ひ、夜に入る迄談笑し、晚餐の饗を受けてかへる。議會解散の新聞号外到る。稲葉岩吉より上田恭輔の著書を贈らる。山崎恒四郎より来書。

二十六日

晴。大江乙亥門、森脇美樹来訪。十時外出、内藤久寛を日石会社ニ訪ふて話し、且つ鶏血石一函、曲玉金環類一函を渡す。これは書簡と共に譲りたる也。先づ此二点丈渡「(二ウ) したる。神田宝亭ニ飯し、故山口博士遺書購入之件ニ付、入沢博士を東大医科ニ訪ふて交渉し、去つて首藤陸三妻の死去ニ付、牛込袋町の居を訪ふて吊礼を行ひ、登校事を処して帰宅。日載を筆して夜に入る。

二十七日

晴。瀬川光行、菊屋、吉田半迂来訪。明晩、久須美秀三郎ニ花屋敷常磐屋ニ招かる。山口博士の遺書之件ニ付、鈴木愛之助を錦町ニ訪ふ。小林堅三を招致し、「二三オ」山口家図書検閲并ニ引取の事を協定す。広井一ニ書状を發す。在熱海坪内逍遙ニ細書を發す。下村大丸の和之助来訪。校友佐伯唯一より來書。

二十八日 日曜

晴。藤木慶祐、三木武吉、樋口清策来訪。清水慎太郎を招き、土地家屋購入之事ニ付依頼する所あり。午後、落合の莊ニ到る。今夜、郷里の同人と共に花屋敷常磐屋ニ久須美秀三郎ニ招かる。大竹、坂口、内藤、今泉鐸次郎等同席。「二三ウ」

二十九日

晴。巴里發吉江喬松より來書。伊東祐毅より万国年鑑を贈らる。坂口五峰より飯ずしを贈り来る。文明協會の並木、森脇、大久保（栄次郎）来話。毛利宮彦、山口より図書引取の件ニ付来訪。万屋より新刊図書八冊購入。広

井一ニ書を投ず。朝来咳嗽甚しく前田医師より鎮咳剤を得て服用且つ温臥、書を読む。

三十日

「二四オ」

晴。菊屋来る。茶壺を購ふ。昆田文二郎来話。客去つて後、雜書を読む。倦來り神田辺ニ散策。広井一より電報にて出京出来かぬ旨を申し来る。夜來書を読む。

三十一日

晴。種村宗八、田中唯一郎校用にて来訪。久須美秀三郎、今泉鐸二郎、坂口五峰来訪。久須美、今泉を留めて書画を展観、午餐を饗して別る。広井一より來書。午後、咳嗽頻発の為臥す。在熱海「二四ウ」坪内逍遙より來書。露都発片上伸の絵はかき到達。

二月

一日

昨日ニ引きつ、き咳嗽甚しく出づ。朝来、病摩ニ在り。医を招き一診を受く。咽喉カタルにて深く憂ふるに足らずと云ふ。服藥後咳嗽少しく収まる。内藤「二五オ」より

明日新喜楽ニ招かる。久須美より梨果を贈らる。小田島彦太郎来る。長時間話して去る。

二日

晴。咳嗽去る。今朝病床を徹す。朝来、増子、坂口五峰、広井一來る。五峰、広井と午餐を共にす。午後より久須美秀三郎来訪。広井、久須美同伴、美術倶楽部ニ書画の売立を觀。四時、内藤久寛ニ招かれ久須美、広井、坂口等と共に築地の新喜楽ニ到り新潟新報の件ニ付協（二五）議す。今夜、同席の人加藤高明同志前代議士、斎藤、目黒、久須美東馬、大竹、鳥井外ニ西脇、今泉鐸次郎等。席上加藤子と時局を談す。増子喜一郎来訪。

三日

晴、風。小久江来訪。会社の内情、渡辺の私曲を内話して去る。坂口帰郷ニ付来訪。吉田半迂、林則徐の遺印を齎らし来り見す。余、食指動き持主ニ割愛を交渉せしむ。菊屋よりラデン香筒を購ふ。市島貞二発狂したりとて同人妻并（二六）ニ範三妻より云々の書状到達す。貞二は（註）命の孫にて福島ニあり。これ迄往来もせざるもの也。午

後、高木を訪ふて茶壺を購ふ。志野水指代七円五十錢払済。今夜、校友大会を兼ね、渋沢男の寿宴を帝国ホテルニ開く。大隈侯之祝辞と男の答辞は共に長時間ニ渉り両ニ聞くべく、近來会心の演説なりし。長かく校史ニ留むべき者也。

四日 日曜

晴。紫安新九郎来話。松岡黒太郎来訪。（二六）羽田智証ニ紹介す。女兒と共に銀座、浅草ニ散策、薄暮帰宅。大隈侯より天杯拝受の内祝（十六日）之招待状来る。米独国交断絶せん模様ありとの新聞号外出づ。

五日

晴。湯浅来話。小久江成一、例の印刷会社の内事ニつき密談して去る。客去る後、日載を録し午後ニ至る。四谷黒田太久馬へ旧臘勘定残金五十円払渡す。山田麟之介、身上的件ニ付父耕次郎より（二七）来書。午後図書館ニ到り新購の図書を検す。今夜、学士会ニ於て図書館協会の評議員会を開く。坪内士行より来書。又、増子喜一郎より来書。

六日

晴。毛利宮彦、館用にて来る。小田島彦太郎来訪。其の携へ来る所の点銅の唐壺并ニ印敷老帙を購ふ。茶壺代三十円払済。平山堂より落札品三点（光悦本、菱湖草稿、木下順庵幅）を領収す。午後より図書館ニ到り家蔵の書簡類を「（二七）整理す。今夜、紅葉館ニ於て読売新聞旧同人と本野子爵を招飲。高田半峰、松平破天荒、中井錦城、増田、足立等十名出席。柏崎東京より鱈の漬物を贈り来る。

七日

晴。高木へ使を遣り不用品を返す。菊屋花を齎らし来る。不用品を払ひ香筒代金仕払了る。石塚三郎、病氣再発ニ付見舞状を發す。丹呉康平ニ書を投し依頼之琴の箱ニ付云々す。午後、高田宅ニ秘密会を開らき、学「（二八）長の進退問題并ニ学校の前途ニつき凝議す。坪内と余の外塩沢、両田中出席す。帰宅後大木操来話。晚餐を共にして去る。高橋義彦ニ書を投す。

八日

晴。吉田半迂来る。十時より図書館ニ至り十二時迄家蔵の書簡を整理す。大鳥居弃三来訪。三時半保険協会々場に於て実業之日本社主催の故石井勇追悼会あり、臨席。新渡戸、浮田、高田、徳富等之追悼演説あり。余も食後卓上一場「（二八九）の演説をなす。目黒孝平より貝壺籠送らる。

九日

晴。小田島桂香来訪、本日より桂香ニ家蔵書簡の整理を托す。午後より図書館ニ到り書簡巻を検す。東儀鉄笛より来書。逍遙より近稿を載せたる演劇雑誌二種贈らる。和田万吉より来書。

十日

晴。石塚三郎出京来訪、午餐を共にして去る。ぜんまい、饅頭を贈らる。神戸校友遠「（二九）藤麟太郎より来書。午後、増子喜一郎来話。屏風二枚折出来、張交の配合を試む。又、六枚折張交屏風を補修して夕刻ニ到り罷む。今夜、女子兩人を帝劇見物ニ遣す。

十一日 祭日 紀元節

晴。石塚三郎より五十公野租税立替勘定を送り来る。吉田半迂より丹波の野猪の肉を贈らる。林則徐の遺印二顆を購ふ。清水泰次より物を贈らる。薄田斬雲来話。日清保険会社より株主総会の通知「二九ウ 書来、委任状を送る。張交二枚屏風を手貼りして午後ニ到る。大鳥居より来書。踵て文明協会員、余へ付与の株券三十枚を持参。二時、児と共に散策、浅草の活動を見てかへる。書簡巻四、補修の為表具屋へ遣す。

十二日

晴。平山堂利助へ書を投ず。小田島、小林堅三ニ簡す。落合へ人を遣し二枚折屏風を取寄す。十時より高田宅ニ日清印刷重役秘密会を開らき、渡辺専務の処分を協議し午後ニ到る。小田島桂香、牧野閣老「二〇オ」の私印を齎らし来る。即ち購入る。二味律より来書。今泉木舌ニ簡して牧野閣老の遺印を示す。関太郎より来書。渡辺卯市、西村真次来訪。

十三日

晴。石塚三郎来訪。研究室建築の件ニ付、佐藤功一より来書。二枚折屏風を張替。午後、平山堂を訪ひ、内藤久寛を麻布材木町ニ訪ふて、諸般の事を話し晚餐を与にし、自動車ニ送られて十時帰へり臥す。「二〇ウ」

十四日

晴。高橋義彦より来書。大鳥居弃三、歴史図鑑内容の件ニ付来話。二、三の書状を発す。表具屋を招き屏風を修理す。今夕、石塚帰国ニ付内子を遣り物を贈る。

十五日

晴。小林堅三、山口故医学博士遺書代金の件ニ付来話。入沢達吉と電話にて右代金の事并ニ医書仕末の事を云々す。田代亮介来話。田中唯、中村康之助ニ書状を発す。「二二オ」吉田半迂、小田島桂香ニ印材代を払了。登館、書簡を整理し午後ニ至る。落合の荘へ張交二枚折一双為持遣す。四時より富士見軒ニ到る。国史図録編纂顧問を招待して編纂の打合を為す。来会者福原鐮二郎の外萩野、関野貞、関保之助、三宅米吉、溝口、中川（忠順）等来

会あり。校友石橋規矩四郎来訪。

十六日

晴。関太郎、種村、土屋詮教、菊屋、山田清作来訪。荻野由之来訪、白石屏風を見んこ」(二三ウ)とを欲す。乃ち出し示す。午餐を饗して別る。和田万吉、在鎌倉賀田直治より来書。久須美秀三郎より梨果一函を贈り来る。四時より大隈邸ニ抵る。侯天益拝賜の内宴を開かる。鍋島侯一族、松浦家一族の外親近の者招かる。総員四十名ばかり。誠ニめでたし。侯は例ニ似す席上演説もなく、始終謹慎の態度にて終始せられたり。ために窮屈を感じたり。

十七日

「(二三オ)

晴。新潟日報社より考課状到る。関太郎より来書。村井銀行より約手にて二百円借入。返済期四月十七日也。久須美ニ礼状を發す。高橋義彦ニ一書を投ず。高木を訪ふて物を購ひ、風月ニ飯し、平山堂を訪ふて買物代の内へ六十五円払込、更らに染付茶碗、革箱、古織部向付を購ふてかへる。憲政済美会、選挙の為に起る大隈後援会

の後身なり。高田会長の依頼ニ辞し難く名誉賛助員を諾す。高橋義彦へ遣し置たる漢印小包にて戻り来る。丹呉家依頼之琴」(二三ウ)の箱出来。

十八日 日曜

晴、風。暖気春の如し。大鳥居弃三、清水泰次来訪。平山堂より楽の酒次を購ふ。散策、浅草ニ到り金田ニ飯し、活動写真を見てかへる。憲政済美会の件ニ付高田、大隈(信常)兩人より十九日紅葉館へ招待の状到る。廿二日、大谷順作ニ招かる。内藤と電話を交換す。丹呉依頼の琴の箱を鉄道便にて發送す。」(二三オ)

十九日

晴。菊屋来る。竹雲小幅代払了。小久江成一、渡辺専務処分の件ニ付内談して去る。山田清作来る。関太郎より憲政済美会の事を報し来る。貯蔵銀行千六百円の手形期限ニ付、本日更らに改む。登館事を処す。午後一時より大典記念事業の内、恩賜館増築設計ニ付ての委員会を開らき、決する所あり散会す。みつ病み医を迎へて治療を加ふ。今夜紅葉館ニ於て済美会(憲政)招待会あり。余

も高田より参加の囑を受たれど氣」(三ウ) 乗せず、病ニ托して行かす。大隈信常より來書。

二十日

晴。藤本慶祐より來書。種村、高田俊雄來話。書簡を帖ニ張りつけ半日を消す。午後、平山堂、高木を訪ふて骨董を漁り、夕刻より南葵文庫ニ図書館協会評議員会を開らき、協会創立二十五週年紀念会等ニつき協議し、十時帰宅。外出中、横山俊二郎、三越店児童用品研究会の武田真一來訪。」(二四オ)

二十一日

晴。湯浅半月、坂口五峰來話。伊藤輔利、商科講義の件ニ付來訪。大谷順作より來書。明晩香雪軒ニ招かる。在熱海高野清八郎より來書。巻物四卷補修の爲表具屋へ廻す。落合の莊ニ到り、物を整理してかへる。山崎恒四郎妻來る。夕刻より雪降る。小久江晚間來訪、日清印刷渡辺問題ニ付内話して去る。関太郎より來書。文部省学務局より標準目錄之件ニ付來書。表具屋ニ托したる名家遺墨五卷手簡三卷」(二四ウ) 修補成る。

二十二日

晴、風。日清印刷重役処分の件ニ付十時より前島方ニ重役一同会し、午後二時迄凝議す。終つて登館、書簡を整理し、五時より大阪の大谷順作ニ招かれ香雪軒ニ飲み、十時帰宅。今泉鐸次郎より來書。田中稲城ニ書状を發す。

二十三日

「(二五オ)

晴。種村、出版圖書広告案を齎らし來る。書改めて渡す。書簡帖ニ張込をなして正午ニ到る。飯後登校、理事会ニ臨み恩賜館増築案を決す。又、近かく購入したる圖書代金五千元之支出法を決し、銅像事件余波問題ニ関し理事会の内相談を受け、夕刻帰宅。外出中、渋谷音吉來訪。追加目六案ニ付田中稲城より來書。加賀翠溪より近購圖書目錄を送り來る。晩間小久江、会社の件ニ付内話。

二十四日

「(二五ウ)

晴。みつ病臥中の処、昨夜來氣管支カタルニ罹り今朝発熱あり。医を招き手当を爲す。小久江成一、前日來の事ニ付來話。坂口五峰、今夕帰国ニ付來話。午餐を与にす。午後登校、吉田東伍より其所藏の朝鮮本千七百余冊を圖

書館へ譲り度云々ニ付依頼あり。云々の条件にて譲受を諾す。二時より恩賜館ニ維持員会を開らき前日理事会ニ決定の件、其他を決議す。表具屋ニ二、三のものを托す。書画張込帖ニ二十数枚みづから張り込み夜に入て罷む。寝後、」(二六オ) 宮島次郎より電話にて宗家主人京都ニ在り、病篤しと報じ来る。

二十五日 日曜

晴。今朝、宮島と電話を交換し、宗家主人の病状を問ふ。病症胃癌にて、一月中旬以来治療の爲め京都ニ在り。昨今漸々危篤ニ瀕しつゝありと聞く。日清印刷の件ニ付今朝又々前島邸ニ会す。小林重役より辞任の申出あり。事まずく面倒也。宗家主人病氣見舞之為夜行京都行を決し、在京都小野寺文哉并ニ柊屋へ電報」(二六ウ)を發す。

高木、平山堂を訪ふて平山堂より瓢沓個購入。旭莊、山陽ニ贈りたるもの。瓢身ニ金字を題す。帰宅後、宗家事務所より使來り、主人危篤の事を報す。丹呉康平より琴の箱代を郵送し来る。小田島ニ手当廿五円并ニ圖書代十二円渡す。八時の発車にて宗家主人見舞の爲京都へ向け

出發。車中、宮島次郎ニ会す。これも見舞之爲京都へ赴く也。

廿六日

」(二七オ)

晴。九時京都着。宗家の家人自動車にて出迎ふ。車中迎ひの者ニ病状を聞けば今朝五時終ニ逝去と聞き慨然たり。直ニ柊家ニ投す。若主人并ニ小野寺、波多野等二つき種々發病以來の事を聞く。京都ニ懇意の医あるため、一月中旬入洛、患部切解の後、経過よろしからず。衰弱追々甚しく、終ニ逝去の不幸を見るニ至りたりと云ふ。享年七十有一。東京宅へ發電、訃を伝ふ。午餐後小間を得て、鳩居堂を訪ひ書画を観る。二時より旅館の一室ニ親族会議を開らき」(二七ウ) 仮葬順序を定む。明日茶毘ニ附すること決定、夜に入る。今夜、建部遯吾、宮島次郎と故人の枕頭ニ夜伽をなし、天明ニ到る。雨あり。

廿七日

雨。払曉より臥床、昨夜の不眠を補ふ。十一時起床。遺骸撮影之事、死亡広告の件等ニ付親族協議。午後、余の考案にて生花を以つて面部を囲み撮影し了る。本願寺法

主代理見舞ニ来る。五時半より納棺の式を」(二八) 行ふ。六時半、旅館出棺、棺を自動車ニ乗せ親族外三十余名自動車ニ分乗して陪隨、花山の火葬場ニ到り茶毘ニ附す。八時帰館。深更、嗣子再び火葬場ニ到り骨を納む。東京宅へ書状を發す。前島弥ニ發電、帰期を報す。

廿八日

曇天。今朝遺骨を拝す。朝餐後、鳩居堂を訪ふて山陽翁遺愛の瓢を觀る。終に其の姉妹瓢、銘赤鳳卵を購ふ。価六十五円、外ニ宣徳銅書鎮を購入、」(二八九) 価二十円也。午後二時、宗家嗣子遺骨を擁して帰国之途ニ就く。停車場迄見送る。帰宿後、閑を得て日載を録す。今夜帰京と決し、東京宅へ發電す。大丸の辻孝次郎來話。八時發急行汽車にて帰東の途に就く。保坂夫婦も同車。車中、大島居弁三の帰京するに會す。

三月一日

晴、風。九時着京、直ニ帰宅。小田島彦太郎、並木覺太郎、小久江成一交々來訪。」(二九) 不在中の來信數十通

を檢し正午ニ到る。午後、不在中の雜務を処し、終日外出せず。

二日

晴。南宗寺の片岡玄嶺來り物を贈らる。二、三の知人ニ紹介状を与ふ。小久江、会社の件ニ付内話の爲め来る。宗家主人死去の事を聞き、辻川武之進來訪。和田万吉より來書。宗家故主人葬式の日、八日午後一時と決定の趣報あり。午後登館、事務を見る。又、双魚堂書簡殘部」(二九) を檢出し、桂香ニ整理を托す。重複書簡若干書簡帖ニ貼り込、夜に入る。鳩居堂より來書。平山堂へ光悦本謄本十一冊望み人ある由ニ付渡す。火鉢(桶)修繕の爲托す。

三日

晴。京都鳩居堂へ瓢代六十五円為替にて出す。大島居弁三、吉田半迂來話。和田万吉ニ書状を發す。午後、高木を訪ふて物を購ふ。風月ニ飯してかへる。吉田東伍來話。内藤久寛ニ書を投す。女みつ、今朝來」(三〇) 發熱、医を迎へて手当をなす。菊屋へ書を發す。夜來雨あり。在

京宗家事務所より電話あり。

四日 日曜

雨風。兎病漸く可。雨中客なく、双魚堂日載を録し十一時に至り出遊。平山堂を訪ふて物を購い、利助を伴ふて三河屋ニ飯してかへる。越後水原原兵作より百合一箱を贈らる。外出中、昆田文二郎、宗家不幸の見舞ニ来る。神楽江卷石も来訪。台湾發賀田直治より宗家主人死去ニ付云々の電報到る。」(三〇ウ)

五日

晴。大江乙亥、種村宗八来訪。高田邸ニ日清印刷会社の重役会を開き、渡辺の処分問題を議す。結局当分置据、十年紀年会を了り処分すること、それ迄自分社長格にて監督することニ内決。久須美より依頼之新潟銀行看板版下、帝大書記榎本勝多ニ依頼之処出来ニ付、久須美出先修善寺へ郵送。和田万吉、勝田へ礼状を發す。原兵作へ百合を送」(三一ウ)られたるを謝す。学校近隣の医書の件ニ付須田卓爾より來書。小林堅三を招き此件を処す。内藤久寛へ使を遣し事を処す。坂本三郎、憲政済美会の件

ニ付來話。京都鳩居堂より瓢代六十五円領収書到達。明日越後行ニ付、越後方面へ二、三の書状を發す。辻川武之進來訪。閑を得て書画帖を修む。

六日

晴。大江乙亥、増田義一、田代英一より來書。」(三二ウ)種村、小久江成一、小林堅三来る。小久江と会社の件を凝議す。菊屋来る。箔絵の小文庫を購ふ。山陽手沢瓢の箱を作ることを托す。且つ碎巖の瓢ニ題せんことを依頼す。大阪小林儀三郎より來書。本夕越後へ出發ニ付十日期限之丁酉銀行約手、同日納期の国税、明日納付を要する生命保険金を内子ニ交附。午後、河竹繁俊、種村同伴來訪、長時間出版部經画の講談本ニつき協議す。河竹より黙阿弥伝を贈らる。小久江再来、増田義一訪問の結果を報し、」(三三ウ)更らに協議して去る。八日宗家葬儀ニ臨む為、今夜九時四十分の夜行にて上野駅を發す。辻川武之進同行。大隈侯爵并ニ早稻田大学より贈る生花々環携帯。

七日

越後地ニ入り天漸く明く。此辺意外ニ雪深し。潟町辺通過の頃雪チラ／＼降る。東京ニ比すれば全く別天地なり。十一時八分新津ニ着。松平子爵の代理ニ会し、同車して一時過天王新田ニ着。直ちに宗家ニ到る。」(三三ウ) 余は親族中の先着也。石塚三郎、丹呉康平ニ書状を發す。此辺も尺余の雪あり。午後より霏雪紛々たり。牧口、高頭、保坂(代理)四時着。余と同室、漸く無聊を破るを得たり。夜に入り本座敷ニ安置の遺骨ニ対し十二時過迄一同夜伽を為す。室へ引取りて後、護寒の爲め酒を飲む。終ニ高頭と対酌三時ニ到り臥す。

八日

快晴。今朝九時起床。佐藤友右衛門、市」(三三オ) 島友松来訪。友松より元版詩学大成十冊(内一冊欠友松父手沢本也)を贈らる。午後一時出棺。葬式場は小学校体操場を以つて雨雪を慮り仮屋を作る。宗家邸より十二、三町あり。道路狭隘にして雪を排除するに処なく、会葬者草履を穿ち雪を踏むて行く。十二名の僧来会。儀式二時間

余ニ渉る。終つて遺骨を護して帰邸。齋を済まして後、本座敷ニ於て灰寄せの式あり。七時四十分了る。九時頃より又読経あり。明日三十五日を繰上」(三三ウ) 執行ニ付、今夕三部経の内半部予め読了。十時罷む。建部逖吾、島二郎、余等の室に来る。酒を飲み十二時ニ至り臥す。

九日

雨。今朝三十五日の読経あり。十二時終り齋ニ就く。二時十三分の発車にて新潟ニ赴かんとするニ付、牧口、高頭、建部、宮島と辞して一同汽車ニ投す。高頭、牧口と新潟ニ別れ、建部と亀田ニ別れ、余は直行新潟ニ着、篠田ニ投す。于」(三四オ) 時五時、東京を發してより初めて浴す。又、数日精進料理を続けしか晩酌より精進を卸す。坂口五峰ニ用あり、電話を通して聞けば出京の途ニ上りたりと云ふ。加賀幸三来り、新潟新報の経営ニ付て長時間報告を為す。酒を命じて飲み、酣醉寝ニ就く。

十日

雨。新潟新報の山田穀城、小池来訪。穀城の需ニ応し宗家主人の為人并ニ逸事を話して筆録せしむ。終りて始め

て新潟新」(三四) 報社ニ到り其社員ニ接し編輯上ニつき余の所見を云々し工場を観る。于時十二時同社ニ招かれ鍋茶屋ニ午餐を喫す。高橋義彦より来書。栗林貞吉ニ物を贈る。松井郡治、荒川謙二、石塚三郎来訪。今夜又、松井等ニ鍋茶屋ニ招かる。大崎屋の姉妹来る。六時より再び鍋茶屋ニ至る。校友定連五、六名来会、午餐の酒ニ中られて多く飲む能はず。帰宿後宿醒を医せんとて多く飲み十二時ニ到り臥す。新潟の如き酒郷久しく留まるを不可」(三五) とす。明日帰京を決す。弥彦宮司高松四郎来訪。

十一日 晴

今朝、朝食前栗林貞吉を訪問、又、石塚三郎の近かく設けたる上大川前八番町の齒科医院ニ到り其の内部を見る。高橋義彦ニ書状を發す。川上法勵、浅野赤城、久須美東馬来訪。川上同伴、桎屋小路ニ新設の図書館を一覧。久須美ニ招かれ鍋茶屋ニ午餐、一酔。久須美同伴、東帰の汽車ニ投ず。三条より宮島次」(三五) 郎車中へ入り来る。長岡ニ石塚、広井等停車場迄来り見送る。石塚より物を

贈らる。

十二日

晴。七時上野着、直ニ帰宅。久須美秀三郎、和田万吉の書ニ接す。小久江成一、菊屋来訪。高森碎巖ニ囑したる瓢の題跋成る。賀田直治より来書。吉田半迂来訪。菊屋ニ箱代(瓢の)二円払。碎巖へ三円謝儀遣す。印刷会社の重役会あり、疲労の爲欠席す。」(三六) 瑞西発宇都宮鼎の絵はかき到る。在埼玉県卷菱洲より山芋菰函贈り来る。小林堅三館務ニ付来る。午後、神田ニ出て、高木方ニ物を購ひ、四時より富士見軒ニ於て歴史図録編纂顧問会を開らく。三宅米吉、関保之助、萩野、溝口、高橋、福原、吉田(東伍)等来会。熟議十時頃ニ至り散会。

十三日

晴。瀬川光行、書画大観の目録ニ付て来訪、余の意見を徴す。鹿兒島図書館」(三六) の片山信太郎より来書。家藏薩摩政府印の由来を云々す。直ちに謝書を發す。在埼玉卷菱洲ニ簡し山の芋の札を申遣す。小田島桂香来訪。明治三十六年十二月実業日本社のためニ余の談話したる

市島家の事蹟を随筆中より搜かし出し、昨今掲載しつ、ある新潟新報紙上市島の事の補遺として寄稿す。中村進午妻の訃到る。浦部章三より弁護士開業の披露あり。」(三七オ)

十四日

雨。早朝大隈侯を訪ふて宗家ニ花環を寄せられたる謝礼を述ぶ。偶々久須美東馬、広井一、加賀幸三来る。共ニ侯の談話を聴き十二時ニ到り学校ニ引上げ、近日大阪行ニ付一、二の要件を処す。土屋詮教来訪。内田省三より来書。和田万吉ニ書状を發す。大阪の小川為次郎、政教社の三宅雄次郎ニ郵書を發す。

十五日

陰。大江乙亥門、種村宗八、坂口仁一郎、加賀」(三七ウ) 幸三来話。薄田貞敬より世界戦史の目録案を示し来る。大隈信常、田中唯一郎ニ書状を發す。小田島桂香来る。中井敬所旧蔵の肉池を購ふ。湯浅吉郎又来る。文明協会の事務員大阪行の旅費を齎らし来る。内藤久寛と電話にて話す。午後、中村進午妻死去ニ付、小石川伝通院ニ到

り其葬式ニ列す。香典二円遣す。高木方ニ立寄物を購ふてかへる。閑節ニ疼痛を覺へて平臥す。按摩を招き治療。」(三八オ)

十六日

晴、風。小久江成一、粟山博来訪。坪内逍遙を河竹繁雄、種村宗八と同訪。実録叢書編纂の件を協議し、午後帰宅。辻川武之進來訪、長時間宗家故主人の事を話して去る。今夜七時の最大急行にて大阪へ向け出發、文明協会の維持員会ニ臨むか主用なり。

十七日

晴。朝定刻大阪着、花家ニ投す。協会の森脇、大久保来訪。踵て紫案新九郎、山本」(三八ウ) 知士来話。午後原田駒之助来訪。夕刻より大阪ホテルニ文明協会維持員の招待会を開く。四十名来会あり。食前、諸般の報告をなし、食卓上一場の演説を為す。京都より内田博士来会。宴後別室ニ於て、来会之評議員と共に諸般の事を多時凝議し、十一時旅館ニかへる。露国ニ革命起り露帝退位の新聞号外出づ。

十八日

晴。今日日曜比岸入。^(ママ)平田讓衛、山本知士、協会の森脇、山本来訪。平」^(三九七)田談話小刻にして去る。山本等を伴ふて松糸ニ飲み夕刻帰へる。大隈信常より来書。大久保栄次郎の爲めに額面と幅を揮毫す。小川為次郎と電話を交換し、明日会談を約す。今夜、森脇東京へ帰へる。

十九日

雨。室内黯然。新聞紙露皇儲の薨去を伝ふ。雨窓無聊の際、鹿田書店より使来り四、五の図書を示さる。中ニ五山末広鉄腸、高階春帆の自筆本あり。購ふて家苞」^(三九ウ)とす。大久保栄次郎より白鶴大瓶を贈らる。文明協会大阪の評議員乾吉次郎、山田岸太郎、井村健次郎へ余の代人として大久保を回礼せしむ。午後、今井貫一來話。今井去る後、小川為次郎来訪、夕刻迄話して去る。予て預け置きし図書館貴重書二巻、今度持帰へる都合にて領収。晩間小林儀三郎来訪。

二十日

晴。八時三十分発最大急行の汽車にて帰東の途ニ就く。

車中より数枚の端」^(四〇七)書を大阪の用事ある個所へ投す。終日読書。午後携帯の図書すべて読了。無聊を覚ふ。八時三十分中央停車場着。直ニ自動車を僦ふて帰宅。不在中の来書を検して臥す。真島桂次郎より白魚を贈らる。

二十一日

晴。春季皇霊祭。小久江成一来訪、過日托したる東五軒町藤田礼経宅讓受談判之件ニ付報告して去る。真島桂次郎、徳」^(四〇ウ)川頼倫侯等へ書状を発す。正午より女兒を伴ふて外出。神楽坂ニ物を購ひ、浅草ニ遊び夕刻帰宅。斎藤精輔より来書、百科字典八卷成るを報す。高橋義彦より来書。四月二日早稲田中学ニ招かる。粟山博より桑港産柑子を贈らる。

二十二日

晴。菊屋ニ托したる元版詩学大成の箱出来。畑正吉、薄田貞敬、種村宗八来話。坪内逍遙の脚本(桐一葉)帝国劇場ニ演せらる、」^(四一七)ニ付逍遙より四月一日招待を受く。小田島桂香来訪、午餐後去る。晩間坂口五峰来訪。郷里候補ニ窮したりとて余ニ起てと熱心ニ云々す。余冷

然辞し共ニ杯を挙げ量を過こす。

二十三日

陰風。内藤と電話を交換し、明夕往訪を約す。図書館之要件を処す。落合の莊ニ到り物を整理し十一時帰宅。不在中、内山省三来訪。午後、美術倶楽部ニ抵り佐伯毛利の売立」(四一ウ) 書画を見る。偶々場内久須美秀三郎ニ会す。一覽後、相携へて浜町小常盤ニ飲む。平山堂の利助をも招致し酣醉、家ニ帰へる。富山県の小沢隆一より蟹を贈らる。夜来雨あり。

二十四日

雨。小久江成一の案内にて藤田礼経の宅を訪ふて其の各室を見る。大隈侯より電話来り行き見る。侯より永井柳太郎金沢ニ於て選挙を争ふ」(四二オ) ニ付、余ニ参謀すべき様談示あり。大隈信常と内話して、十一時久須美秀三郎を訪問、午餐の饗を受け二時迄談笑、且つ其所蔵の書画を見。登校、維持員会ニ臨み、三時大隈邸へ再訪、信常、横山俊次郎と金沢政戦の件ニ付内議し、去て麻布材木町ニ内藤久寛を訪ふて晚餐の饗を受け、九時自動車ニ

送られてかへる。但馬発高田半峰より永井柳太郎ニ応援すべき旨の電報来る。新潟銀行之」(四二ウ) 為め看版の揮毫をなせる榎本某へ謝金十五円為持遣す。

二十五日 日曜

雨晴。永井柳太郎立候補ニ付来話。内山省三も又来る。金沢の人宮本某、永井立候補之件ニ付踵て来訪。落合の留守居来る。花壇の植物ぬきとり為持遣る。高木を訪ふて物を購ふ。勘定の内へ六円払、不用の織部、火鉢、竹花瓶代価の内へ遣す。小沢隆一、田代英一、森脇美樹ニ書を発す。小久江」(四三オ) 成一ニ藤田宅買受値段の交渉を依頼す。

二十六日

晴。今朝井上辰九郎を訪ふて、藤田より家宅買受の件ニ付依頼する所あり。大隈家ニ信常、坂本三郎と余の加賀行ニ付凝議の結果、余の行くは侯爵家ニ累を及ぼす結果を生せん虞れあるニ付、坂本行くことに内議し、老侯ニ面して其の是認を得、午餐後帰宅。外出中森脇美樹来訪。午後、平山堂を訪ふて天平」(四三ウ) 経一卷を得てかへる。

二十七

晴。小林堅三、館務ニ付来訪。売立ニて落札の白石楷書高子遊覧記幅、平山堂より到達。表具屋を招き三、四の書卷の修理を托す。文明協会より百円也来月返済の約にて融通を乞ひ、森脇持参。広田金松、森槐南の書幅を齎らし来り示す。十時より大隈邸ニ抵り、永井柳太郎選挙区の件を処し、午後帰宅。巻菱洲より来書。亦「四四オ」自書手本四本贈り来る。原久一郎より来書。午後平山堂を訪ふ。三時過より出版部の実録叢書編纂の協議を為す為、三田村玄竜、水谷不倒を富士見町魚久方ニ招き夜に入るまで相談す。新潟の館恭平より鱒の味噌漬を贈らる。

二十八

朝来雪チラ／＼降る、後やむ。吉田半迂、小田島桂香、並木寛、山本知士交々来る。高橋義彦より来書。五時より麻布南葵文庫ニ図書協会大会準備の為評議員「四四ウ」会あり出席、早々辞して帰へる。

二十九

雨、後雪。坂本三郎、山本知士、選挙の件ニ付来話。森

脇美樹ニ本野外相宛添書を与ふ。表具屋ニ白石書帖、田能村竹田退役願書草稿の幅表装を托す。副島蒼海今様之幅出来。十一時より登館々務を処す。午後三時女兒を伴ふて浅草ニ遊び、夜に入り帰宅。「四五オ」

三十

晴。小林堅三、広田金松、山本知士来訪。小久江成一來訪、かねて依頼し置ける藤田宅購入談判の件ニ付云々す。同伴ニつき井上辰九郎を訪ふて依頼する所あり。午後散策。表具屋ニ短冊幅改装を托し金十円払。平山堂を訪ふて染付筒茶碗壹、紀梅亭山水幅の売却を托す。春琴梅と水仙の幅を借り得てかへる。越後中蒲原郡候補を欠クニ付、建部遯吾を推す云々ニ付内藤久寛より電話にて相談「四五ウ」あり。越後憲政党の候補扨底、当局の坂口五峰窮して終ニ建部ニ交渉するに至る。建部の諾否未定也。

三十一日

晴。藤本慶祐、赤堀又次郎、佐々木集寛来訪。踵て山本知士来る。午後平山堂を訪ふ。今夜、加賀の横山俊次郎と共に大隈信常ニ招かれ築地富貴樓ニ飲む。酣醉家ニか

へる。外出中、建部遯吾立候補ニ付来訪。一簡をのこして去る。鎌田栄吉長」(四六オ) 男結婚披露の案内状到る。平山堂より景文雪中島原の図一幅購ふ。福沢翁詩幅売却。方平山堂へ托す。

四月

一日

晴。湯浅吉郎、秘密出版の件ニ付来話。小菅一、小林堅三来訪。在越後建部遯吾ニ書状を発す。又、高橋義彦ニ投簡。午後、坪内逍遙ニ招かれ帝国劇場の劇を見る。逍遙作桐一葉七幕。二番目助六を見す十時帰宅。大隈信常より酒を」(四六ウ) 贈らる。十三日富士見軒ニ於て斎藤虎男、三輪潤太郎三女と結婚之披露案内状到る。今泉雄作より前日六朝本影本を贈りたる謝書到る。

二日

晴。赤堀又次郎、渋谷音吉来訪。和田万吉より来書。大隈信常ニ書を投して酒を贈られたるを謝す。日本図書館協会ニ演説を請ふ為石黒忠恵男を訪ふ、不在。同じこと

につき三宅」(四七オ) 雄次郎を赤坂永坂町ニ訪ふて其承諾を得。帰路、平山堂ニ立寄帰宅。横山男爵并俊次郎より平日浜町常磐屋ニ招かる。林縫之助より文晁百種出版云々ニ付来書。文部省より目録編纂委員手当金支給の通牒来る。

三日 神武天皇祭

晴。朝より落合の荘ニ到り二時間余在荘帰宅。鎌田松造来訪、午餐を与にして別る。石黒男より図書館協」(四七ウ) 会講演の件ニ付電話来る。和田万吉ニ書状を発す。小林堅三親族危篤ニ付帰国の為来訪。成田図書館の加藤万作来訪、物を贈らる。五時より横山男爵同俊次郎ニ招かれ浜町常磐屋ニ到り飲む。山本知士より来書。八日上野常磐華壇ニ於て日清印刷観桜会の案内状到る。和田万吉より来書。午後より降雨。

四日

雨、後晴。今朝、図書館協会の演説を乞はん為渋谷男を王子ニ訪ふ。病臥中、面会」(四八オ) を得すして帰へる。広田来る。森槐南幅代払済。高木方を訪ふて三島の壺を購

ひ、風月堂ニ飯してかへる。不在中、井上辰九郎、藤田礼経を訪問の結果を報じ来る。高橋義彦より来書。午後閑を得て仮寝。按摩を僦ふて夕刻迄休息。金沢発坂本三郎より来書。

五日

晴。田代亮介、洪沢音吉、種村宗八来訪。在越後建部遷吾より来書。立候」(四ハウ)補断念を報し来る。鈴木愛之助より山口家より購入せる図書代金の件ニ付云々の電話あり。在奉天山崎恒四郎より来書。出版部の岸至来話。

十時、内藤久寛を日石会社ニ訪ふて話す。図書館協会之為百円の寄付を受く。又、同社新任理事田中次郎ニ会す。途中午嘔し、高木方并ニ好古堂ニ立寄書画を購ふてかへる。石本暁海より来書。和田万吉ニ書状を發す。夕刻、又平山堂を訪ふ。」(四九オ)

六日

晴。大鳥居弃三、石本暁海、小田島彦太郎ニ書状を發す。井上孝吉帰国旅費ニ差支哀を請ふ、二円遣す。大隈侯を訪ふて図書館協会講演出席を乞ふて其承諾を得。本田信

教、一身上の件ニ付来話。十一時より出游、児女のため物を購ふ。和田万吉より来書。松井郡治立候補ニ付書状を發す。和田ニ答ふ。通俗世界史末巻地図索引部出来。」(四九ウ)

七日

晴。小田島彦太郎来訪ニ付、近購之書画を示し時を移す。十一時日清印刷会社之重役会ニ臨む。午餐後、早稻田の同人百数十名と歌舞伎座ニ觀劇、十時帰宅。田代亮介、和田万吉より来書。又、洪沢栄一四男結婚ニ付十五日披露の案内状到る。晩間雨あり。末女みつ、本日女子大^(マミ)子。中学部卒業。三木武吉より選挙の件ニ付来書。

八日

」(五〇オ)

晴、風。四、五の端書發して当用を弁す。広田、書画を齎らし来る、買はず還す。十一時より外出。高木を訪ふて、買物代之内二十円払入。風月堂ニ飯し、上野表慶館ニ特別展覽会陳列の南画を觀、更らに不忍池畔の奠都記念博覧会を觀、五時より日清印刷会社の招待会ニ招かれ早稻田学苑の諸同人并ニ諸会社員と共に常磐華壇ニ飲み、

九時過帰宅。」(五〇ウ)

九日

晴。種村宗八、世界全史再版の件ニ付来訪。入沢達吉より電話あり。新潟銀行、故宗家主人の大理石像を作り贈呈の爲め製作を武石ニ依頼せしニ付、余ニ指導せよと申来る。山田清作来話。又、賀田直治、台湾役人辞職之上帰京来訪、物を贈らる。昆田文次郎、前月来病氣入院之處、昨日退院と初めて聞き、賀田同訪見舞を爲す。十二時、内藤久寛を日石ニ訪ひ、同伴日本俱樂部ニ午餐を共にし、別室ニ日石会社祝賀会之」(五一オ) 準備ニ付、二時程内議を受け、三時帰宅。兒女を伴ふて出遊、浅草公園の活動写真を見、大金亭ニ晚餐して夜ニ入り帰宅。和田万吉より来書。

十日

晴。前月、文明協会より借入金百円の内五十円返金。久須美秀三郎を訪ひ、其囑ニ依り幅箱数個の匣面ニ揮毫、午餐の饗を受け二時過帰宅。外出中、毛利宮彦帰国中之処帰宅、物を贈らる。和田万吉より来書。」(五一ウ)

十一日

晴。梅沢和軒来話。踵て田中唯一郎来訪、長時間話して去る。丹後直平六男正雄来訪、弟中学予備校へ入学ニ付其の保証人を諾す。落合の莊ニ到る。樹木移植の差図をなし、四谷を廻り平山堂ニ立寄、更らに高木方を訪ふて帰宅。和田万吉より来書。三枝光太郎より山陽逸事を載せたる名古屋の新聞紙を寄せ来る。小林堅三帰京、物を贈り来る。大阪岸本市太郎、山本知士より選挙事務ニ付来書。又、梅沢」(五一オ) 精一より来書。

十二日

晴。毛利宮彦、小林堅三来訪。井上辰九郎来訪、藤田礼経と家宅土地購入談判の結果を報す。結局二万六千五百円にて購入と内決す。午後、和田万吉を帝国大学図書館ニ訪ふて、明日大会并ニ講演会ニつき打合を爲す。夕刻より四谷見付三河屋牛肉店ニ於て一ツ橋時代帝国大学同窓会を開らく。出席十八名。野呂景義還暦ニ付、赤」(五二ウ) 頭巾を授く。松井郡治より来書。大阪岸本、山本より選挙ニ付来電。

十三日

雨。今朝、大隈侯を訪ふて、今夕図書館協会の講演会ニ出演を乞ふ。前日来足痛愈へず、欠席と決す。日本石油会社ニ内藤を訪ふて家宅買受の件ニ付協議し、去つて図書館大会々場南葵文庫ニ抵り式ニ臨み、午後同人之講演を聴き、五時徳川総裁の自動車ニ同乗、講演会場高等商業学」(五三才)校ニ到り、六時半より其大講堂ニ於て開会、余、先つ一時間ニ涉り会の二十五年経歴を陳べ、三宅雄二郎、石黒忠恵男講演、徳川総裁挨拶をなして九時半閉会。今夕、斎藤虎男と三輪潤太郎の娘と結婚の披露会あり。臨席出来兼、祝物を人を以つて遣す。

十四日

晴。赤堀又次郎、佐々木集寛、堀江源吾来訪。九時より図書館ニ到り其陳列の図書」(五三才)を見る。十二時、図書館協会の諸同人と小石川植物園ニ会し、午餐後研究会を開き、夕刻同処ニ於て懇親会を開く。来会者二百名ニ垂んとし、未曾有の盛会。余も協議会ニ懇親会ニ二、三回起つて演説を為す。外出中、吉田東伍来訪。

十五日

雨。本日、徳川総裁の大磯の別邸ニ招かれ、図書館同人一同借切りの汽車にて八時四十五分東京中央駅を發して行く。壺行新聞記者を併せて二百名。汽車の四台借」(五四才)切り総裁家より往復汽車券を贈らる。十一時大磯着。皆々歩して侯の莊ニ到る。余等数名特ニ人車を与へらる。莊中の桜花爛熳咲乱れ、門の右側ニ仮屋数字を特設し用意到れり。午餐の饗応、又鄭寧を極め、園遊会の普通の例と異なり。食後雨中ながら山ニ登り探勝ニ耽ける。例の製陶所ニ樂焼の興あり。一室ニ北沢楽天漫画を試む。余も同人の爲めに数紙ニ揮毫す。福引にて漫画を頒ち、夕刻一同雨を衝て汽車ニ投す。車中、晩」(五四才)餐の饗を受け、九時帰宅す。

十六日

雨。奥田芳彦、種村宗八、小田島彦太郎、赤堀又次郎、小久江成一来訪。小田島より竹根急須を購ふ。田中唯一郎ニ簡して事を托す。石本晁海より来書。坪内逍遙より依頼之彫刻代金ニ関する書状ニつき同人へ廻付す。午後、

漸く事ニ倦み、女児を伴ふて散策、浅草公園の活動写真を観、夜ニ入り帰宅。」(五五オ)

十七日

晴。文明協会へ五十円返金。村井銀行約手期限ニ付二百円返金。文明協会の堀江源吾来る。種村宗八、奥田芳彦来る。芳彦ニ所蔵之画幅数十を出し示す。小久江成一來訪、藤田礼経訪問の結果を報す。午後、閑を得て雑筆を録す。今日五時より在京図書館関係の重立たるもの主人となり、出京中の同人の重立七、八名を星岡茶寮ニ招飲。徳川総裁も来訪。酣酔、夜深ふしてかへる。」(五五ウ)

十八日

晴。種村宗八、世界全史再版趣意書の稿を齎らし、斧正を請ふ。即ち加筆して遣す。日石会社より来月五日紀念会の招待状到る。当日内藤社長朗読すべき祝辞の稿を余ニ加筆せよとて郵送あり。朝来客を謝し、近日売立の爲め平山堂へ依托すべき書画骨董を点検し、午前十時より午後三時ニ至り已む。四時浅草大金亭ニ到り、大図書館管理者数名を招き早稲田ニ於て設計中の新築」(五六オ) 図

書館図并ニ図書分類案を示し其意見を徴す。

十九日

晴。宗家より忌明の札状来る。種村、堀江源吾来訪。来月居を移すニ付、後園の大楓樹を落合の荘ニ移す。十時より莊を訪ひ植木屋ニ差図をなし四時帰宅。内藤久寛、平山堂ニ書状を發す。和田万吉より来書。刊行会より近刊小冊子を贈り来る。加藤万作妻来る。」(五六ウ)

二十日

晴。賀田直治、湯浅吉郎来る。徳川侯ニ竹製呼子を贈る。小久江成一ニ書を与ふ。貯蔵銀行之手形千六百円、昨日期限ニ付本日更らに差入、期限六十日間(六月十八日限)。来客を謝して売却すべき書画骨董調に半日没頭。四時倦むて外出。高木を訪ふて物を購ふ。平山堂と書簡の往復を爲す。本日、衆議院議員選挙当日也。余も選挙権あれとも故ありて投票」(五七オ) 場ニ行かずして已む。

二十一日

晴。終日在宅。道具売却の爲め朝来平山堂主人并ニ利助来り道具の目録を作り、夕刻ニ到る。道具は筆、香合、

茶器其他雜品貳百五十点ばかり。目六を作り終りて平山堂ニ交付し了る。本日、選挙結果（市部）新聞号外にて発表さる。余の多少の力を致したる三木武吉、紫案新九郎共ニ当選す。内藤より依」（五七）頼を受けたる祝辞の稿ニ加筆す。橘静二父顯三の訃到る。葬式二十三日也。

二十二日 日曜

晴。橘井清五郎、小沢隆一より来書。今日亦昨日ニ引続書画を平山堂ニ引取らせるニ付、朝来検出ニ没頭す。廿五日（向島ビル会社内午前十時より）温交会、五月二日（上野精養軒）五二会、本月二十五日早稲田大学高等予科会（富士見軒）案内到る。皆出席の返書を」（五八）發す。正午より平山堂の兄弟来る。今日は骨董数点の外、名家書卷六十余卷、掛物五十余幅、白石屏風壹双売立のため引渡す。新潟久須美東馬より大多数当選の電報到る。直ニ祝電を發す。松井郡治より落選の電報到る。

二十三日

晴、風。土地家屋購入之件ニ付、早朝高田半峰を訪ひ、更らに池田竜一を保險会社ニ訪ひ、内藤久寛を日石会社

ニ訪ひ三」（五八）千円請取。更らに小久江成一を印刷会社ニ訪ふて二千八百円を手付金として宅地持主藤田ニ渡し、茲ニ購入之約束を為す。二時帰宅。石本暁海より来書。新潟発太田為三郎、林静二等図書館同人の絵はがき到る。橘静二父顯三死去ニ付、袋町教会堂ニ於て執行之葬儀ニ臨む。高木方を訪ふて一、二の物を購ふ。藤井ニ宅地図写させたる謝儀五円遣す。石本暁海より自作の香合を贈り来る。田中一貞より来書。」（五九）

二十四日

雨。種村宗八、小林堅三来訪。郷人飯塚彦次郎、田代亮介の紹介にて書画を齎らし来り見す。高田早苗を訪ふて金融の件、増田義一ニ依頼之处承諾ありたる旨を聞き十二時帰宅。梶田半古の訃到る。石本暁海、昆田文二郎（在茅ヶ崎）、松井郡治ニ書状を發す。小田島彦太郎、石塚三郎ニ書状を發す。又、高橋義彦、増田義一に書状を投す。明日、村井銀行より二百円借入ニ付、右手形裏書を田中」（五九）唯一郎ニ依頼之書状を發す。又、大阪今井貫一ニ投簡。倦来り理髮床ニ到り散髪。終日雨晴れず。

内藤久寛より使者来り、五月初旬祝典の際の祝辞類数通校訂を依頼さる。楠山正雄、四谷の火災に類焼し図書館之書籍焼失ニ付同人より詫状到る。

二十五日

晴、風。種村宗八、吉田半迂来る。菊池晩香ニ日本石油会社記念祝典祝文数通の斧正を依頼す。午後、直し」(一六〇)の稿到達、直ニ内藤久寛へ郵送す。新村出より来書。落合の荘へ支那竹箱入煎茶器を運はせ自分も行き、若干の書画を齎らし帰へる。午後一時、大学の維持員会ニ臨む。毛利宮彦の件ニ付坪内と内議す。不在中、木村栄之助、稲葉君山の紹介にて来る。夕刻、富士見軒ニ高等予科の打合会有り出席。本日、青山斎場ニ於て故梶田半古の葬式あり。維持員会と差合行く能はず。和田万吉より五月一日図書館同人慰労会ニ付云々の書」(一六〇)状到る。五月一日、渋沢男園遊会ニ招かる。

廿六日

晴。故冲楨介父莊蔵より来書。和田万吉ニ答ふ。村井銀行より二百円借入、期限六月廿五日也。種村宗八来話。

出版部より近刊印度仏教史外一配本し来る。在茅崎昆田文二郎より来書あり。相見繁一、林縫之助紹介にて来訪、文晁の作を見んことを請ふ。二、三の画幅を示し画稿壺冊を貸付す。越佐会幹事并ニ小林堅三来訪。午後、高木を訪ふて不用」(一六一)骨董返却、残勘定結済。絵はかき、生花等を購ふてかへる。夕刻より神楽坂梅月ニ坪内逍遙、三田村玄竜等と会し出版物ニ付協議す。

二十七日

晴。菊池晩香へ使を遣り、日石より依頼の祝文の訂正を托す。九時より落合の荘ニ到り物を置かへ、留守居ニ物を与へ十二時帰宅。高橋義彦より来書。関太郎、山形出先より之書状到る。午後、閑を得て筆研ニ親しむ。不在中、大鳥居弃三、田代亮介来る。大」(一六二)阪今井貫一より来書。倦来り、神田辺ニ散策、物を購ふて帰へる。

二十八日

雨。種村宗八、森脇美樹、小田島彦太郎来訪。斎藤精輔来訪、百科第八巻を贈らる。大阪懷徳堂より其出版の叢書を贈らる。伊与部太吉より来書。毛利宮彦母出京ニ付、

坪内逍遙方ニ会見、宮彦身上の事を協議し、午餐後帰宅。
小田島ニ目六筆写料二十五円渡す。表具屋より直し物一
幅二巻出来。真島」(六二五) 中太郎、六郎来訪、物を贈ら
る。雨中、神田辺を散策し物を購ふてかへる。

二十九日 日曜

晴、烈風。大隈侯夫妻より天杯拝受内祝宴会(五月六日)
の案内状、余夫婦宛到る。同し内宴ニ前月招かれたり。

此度は少々表向之会と見へたり。宗家相続人初之丞、徳
厚と改名の趣新聞紙にて披露あり。文明協会より歴史図
録第一輯を為持遣す。不備の点を指図す。十時向島サツ
ポロビール会社構内ニ温交会」(六二五)を催す。十二時迄
出席。辞して浅草金田ニ久、みつの女兒と待合せ、午餐
後活動写真を見てかへる。不在中、毛利宮彦母来訪、物
を贈らる。表具屋ニ托したる丈山、六樹園、吉田松蔭、
田能村竹田の四幅成る。斎藤虎男より婚儀の返礼として
物を贈り来る。

三十日

晴。田中唯来訪ニ付、学校の事を内議す。飯塚彦次郎、

吉田半迂来る。大阪懷徳堂、真島桂次郎へ書状を発す。

表具」(六二五) 屋へ十円払。芝居錦絵のことにつき小林文
七、新潟校友会々期につき松井郡治ニ書状を発す。十一
時より落合の莊ニ到り午後三時文明協会事務所ニ幹部会
を開らく。夜ニ入り帰宅。

○五月

一日

晴。丹呉竹次、小林文七、小田島彦太郎、菊屋、平山堂
利助交々来訪。日本石油会社よ」(六二五)り創立三十年紀
念として七宝青瓷花瓶壺対を贈らる。一時より洪沢男爵
ニ招かれ王子の邸ニ催されたる園游会ニ臨み、夕刻図書
館協会幹部と南鍋町青柳方ニ会飲す。

二日

晴。湯浅吉郎、小田島彦太郎、山田清作来る。日石会社
より日本石油史を贈らる。高木を訪ふて吊燈籠、衣桁、
茶器を購ふ。名古屋毛利まりより来書。高橋義彦、先年
貸付の学山堂印」(六四〇) 譜戻り来る。帝国大学より史料

展覧（六、七）、寺崎広業より自作展覧（竹の台五日より廿五日迄）、小林文七より広重版画展覧（五、六）、浜尾新其他より狩野芳崖三十年記念陳列（四日より八日迄帝國鐵道協會にて）、何れも案内状到る。和田万吉、大鳥居弃三、高橋義彦ニ書状を發す。土地家屋購入ニ付先日來金融工風中の処、少しく不足を感じ半日家居、更らに若干売却品の取調をなす。土子金四郎の計ニ接す。」（六四ウ）

三日

晴。菊池三九郎へ謝儀十円為持遣る。日石会社祝辞直し料也。高田半峰ニ土佐光親の画幅を贈る。和田万吉ニ書と与ふ。且つ越後塩引沓片を小包にて贈る。吉田松蔭漢文尺牘沓幅を久須美秀三郎へ遣し、杉聴雨の箱書を依頼す。十時半偶々來会の並木覺、吉田半迂、小田島桂香を伴ふて落合の莊ニ到り午餐を共にし、家藏の茶器を出し示し、夕刻帰路ニ就く。並木と四谷ニ下車、平山（五）堂を訪ひ三河屋ニ晚餐を共にしてかへる。四、五の來書ニ接す。新居登記移転時日ニ付、小久江成一ニ書状

を發す。高田、久須美より來書。文明協會より書架到來。

四日

晴。栗山博來り近著を贈らる。種村宗八ニ世界全史の広告案を与ふ。真島中太郎を旅宿ニ訪ふて物を贈る。和田万吉より來書。高木を訪ふて若干の払をなす。外出中、増子喜一郎來訪。二時小石川伝通院ニ於ける土子金四郎の葬（六五ウ）式ニ臨む。香典二円遣す。帰宅後、家書を整理し、近日引越しの準備を為す。夕刻より雨ふる。

五日

雨。種村宗八來る。片山信太郎、丹呉竹次より來書。坂口五峰來訪。午餐を共にして一時相携へ国技館ニ挙行の日本石油会社創立三十年祝典ニ臨み、夜ニ入り富士見樓ニ開会の越佐会ニ出席、演説一番をなし、十時帰宅。真島中太郎より來書。電話を（六六ウ）学校より譲り受ニ付種村より來書。

六日

小雨。早朝、自動車を僦ふて内藤久寛を麻布の邸ニ訪問し、昨日の札を陳べ書翰目錄を交付し、且つ紀念として

玉器五種を贈る。今回土地家屋購入ニ付、内藤之厚意の大なるを謝する也。内藤より更らに壹千五百円土地購入費の内へ贈与あり。又、自動車を駆り高田邸を訪問し、坪内と共に学校幹部ニ付重要會議を開く。結局高田を総長とし、内閣交迭の「(マヤウ)」の已む可らざるを協議す。此會議は学校の元老會議也。二時より高田、坪内と相携へて大隈侯の園遊会ニ臨む。侯は天杯拝受の悦を頒たんとて早稲田学苑の教授校友等を招かれたる也。来会者二千名。

七日

雨、後晴。田代亮介、関太郎來訪。関を得て茶後録を筆し時を費す。新潟校友会の件ニ付荒川謙二より來書。午後、高木、平山堂を訪ふ。高木ニ「(六七オ)」円払。平山堂より平卓を購ふ。帰路雷雨あり。

八日

晴。坪内逍遙より近著「役の行者」を贈らる。山陽遺愛瓢の添巻表装成る。落合の莊へ若干の道具を荷車にて運ぶ。菊屋來る。日清印刷の重役会ニ臨む。内子と落合の

莊ニ到り追加売却の品物を点検し、書画若干と共に車ニ運はせてかへる。加賀幸三來話。」(六七ウ)

九日

払曉大雨あり。日出後晴。平山堂斎藤利助ニ書状を發す。古池聿三、二、三の幅を持參。芳齋、竹雲二幅購入。高田俊雄、講義録の件ニ付來訪。午後、高木を訪ふて物を購ひ、古川(マヤウ)の会社ニ昆田を訪ひ、更らに日清生命保險会社ニ酒井谷平を訪ふて、顔面神經ニつき問ふ所あり。方劑を受く。内藤を日石会社ニ訪ひ、久須美父子、広井、加賀幸三、中野鉄平と共に内藤ニ招かれ木挽」(六八オ)町「潜龍」ニ飲む。今日、又増田義一を実業之日本社ニ訪ひ、家宅買受金融の件ニ付依頼する所あり。十時帰宅。

十日

晴、風。今沢慈海、田中稻城より早大図書館目録編纂の件ニ付、先きに示したる案ニ対し意見を申來る。金融の件ニ付平山堂と電話を交換す。大隈侯、郷里ニ於て祖先の墓を修めらるゝ事ニ付、学校より献灯しては如何の意見を田中唯ニ通し」(六八ウ)理事会の議ニ附せしむ。種村

宗八来話。丁酉銀行手形期限ニ付、更らに六十日割引を依頼す。小野寺文哉、宗家の墓誌銘を日高秩父ニ依頼の件ニ付来訪。若干の書画骨董を荷車にて平山堂へ送付す。森脇美樹、大阪ニ来月一日文明協会の講演会を開く件ニ付打合の為来る。電話名簿登録料十二円納付。午後、落合の莊ニ到り物を整理してかへる。

十一日

晴、後雨。増子喜一郎、毛利宮彦来「六九才」話。毛利、図書館建築案を齎らし来る。内子同伴、両国美術倶楽部ニ到り秋元子爵の書画骨董売立を見る。偶々場ニ高橋義彦ニ会し、正午高橋并平山堂利助を拉して松の寿司ニ午餐を共にし、利助と要件を談じ、帰途高木ニ立寄印篋を購ふてかへる。佐伯^(アキマ)□□と土地購入ニ付登記料の件、電話にて話す。

十二日

小雨。増子喜一郎より来書。十一時、高田「六九才」半峰ニ招かれ坪内道同伴、国府津の別莊ニ赴く。半日閑談。今夜一泊。十時臥す。

十三日

晴。九時、高田ニ別れて坪内同伴帰東の途ニ就く。午前十一時半帰宅。松井郡治来訪。京都発和田万吉の書状到る。宗家主人と明朝大隈侯訪問を約す。三木武吉来訪。愛犬、脚部ニ故障を生し病院へ預ける。午後、高橋義彦来訪。同伴平山堂ニ抵り余の売立「七〇才」ニ出したる書画の内、古文書并ニ儒者書卷六十余を出し示し、夜に入り三河屋牛肉店ニ晚餐を与にして別る。宗家事務所より墓誌銘材料を郵送し来る。夜来雨あり。

十四日

雨。菊屋来る。宗家主人を伴ふて、大隈侯ニ謁し葬儀の際の礼を陳べ、侯の庭園を案内し、辞して早稲田大学ニ伴ひ一覽せしめたる上別る。登館二、三の事を処し、正午帰宅。平山堂、高木順ニ書「モウ」状発す。午後、雨の中の新緑を見んとて落合の莊ニ到り、不用の雜品を検して齎らし帰へる。越後旗野家より山の芋、百合を送らる。夕刻迄茶後録を筆す。藤山治一、昨夜急病死去の報到る。

十五日

晴、夕刻雨。国田江東、北越新報の爲め談話をもとむ。

乃ち一場の説話を試み筆録せしむ。種村宗八来訪。高橋義彦の爲め浅草浅倉屋より飛鴻堂印譜を取寄せ齋らして、平山堂ニ高橋「七一五」と会す。余の平山堂ニ売立を托したる書画の内、名家書卷六十余卷二千五百円にて高橋購入。三河屋ニ午餐を与にして別る。秋元子爵家売立、昨日開札の結果百五十万円ニ上る。伊達家売立よりも上首尾なり。

十六日

晴。関太郎、増子喜一郎、種村宗八来訪。落合の莊ニ到り、夕刻迄庭園ニ植木屋の真似をして較々疲る。大阪発和田万吉の絵はかき来る。宗家の墓「七一ウ」誌銘を依頼せんとて牧野謙次郎を訪ふ、不在。

十七日

晴。早朝、牧野謙次郎を訪ふて宗家墓誌を托す。帰宅後、小林堅三来訪。踵て小田島彦太郎来る。季吟旧蔵の古端溪瓢形の研壺面を購ふ。午餐を共にして別る。吉田半迂、

毛利宮彦、又来訪。出版部より近刊図書二部配本し来る。高木を訪ふて紫泥葉式水滴壺個を得。帰路東五軒町ニ下車し、近かく「七一五」移居の宅前を経てかへる。小田島方へ人を以つて研代金廿五円并ニ預り之山陽幅、銅爵を返却す。坂本四方太の計到る。小田島ニ書状を發す。

十八日

晴。今朝八時三十分發下関直行汽車にて大隈侯并ニ家族、佐賀へ展墓帰省につき停車場へ見送る。帰路、内藤を日石会社ニ訪ふて帰へる。高木方へ不用品十八点爲持遣る。表具屋ニ托したる新井白石細楷帖出来。金屏「七一ウ」風修繕、幅箱若干を托す。康有爲書扁額同断。黒の帽子と毛の襯衣を購ふ。岡本季三養母の計到る。広田来る。午後二時、坂本四方太、藤山治一の葬式あり。藤山の爲め青山斎場ニ臨む。帰路小久江成一を拉して四谷の一亭ニ飲む。晩間帰宅。会津八一より蘭の花漬ニ一簡を添へて寄せ来る。今朝四時の地震は時間長かりしも強烈と云ふにもあらざりし処、静岡辺には自然ニ寺鐘鳴りたる処もあり。なか／＼激震なりし様子新聞ニ見ゆ。」(七三オ)

十九日

晴。岡本季三母死去ニ付悔状并ニ香典を遣す。後園の野菊を抜き携へて落合の莊ニ到り、植木屋を招き白躑躅数十株を植ゆ。夕刻帰京。半迂ニ托したる宗家墓碑銘字割成る。高橋義彦より来書、飛鴻堂代金四百円郵送あり。右は浅倉屋払分也。引移之準備として製作せしめたる竹の用心籠出来。出版部より広告案ニ付来書。田辺為三郎より来書。紀淑雄より美術研究「モミウ」所設置の件ニ付来書あり。

二十日 日曜

晴。宗家墓誌の件ニ付牧野静斎を訪ふ。高橋義彦、増子喜一郎ニ書状を發す。大石理円来訪、図書目録編成の件ニ付云々して去る。十一時過末女の為銀座ニ靴を購ひ、浅草ニ散策、大まかり花屋ニ蘭壺鉢を購ふてかへる。外出中、昆田文二郎来訪。中村芳雄、大鳥居弁三、相見繁一、小田島彦太郎ニ書状を發す。明日より廿七日夜、大阪「七四オ」へ出発迄新居買受登記其他多忙の事あり。混雑を予期して日程を定む。図書館の目録の件ニ付、和田

万吉へ書状を發す。松平頼寿伯、高松ニ於て発病と聞き見舞状を發す。

二十一日

晴。早朝、牧野を訪ふて宗家墓表の文稿を申受け、小野寺文哉を招き出京中の宗家主人に示さしむ。学校ニ久しく預け置きたる書簡二十二函取り寄せ検す。「七四ウ」不日内藤へ遣す為め也。午後三時迄にて手簡検閲と共に三百卷之題籤書き了り、内藤方へ急ニ運搬せしむ。余も四時頃内藤を訪問し、多時談話、晩食を共にし、例のことく自動車ニ送られてかへる。本日、高木方を訪ふて若干の払を為す。夜来潤雨あり。増子喜一郎より来書。

二十二日

雨霽。古池聿三来る。幅代三十一円払、更らに豪谷山水一幅を購ふ。小久江成一「七五オ」平山堂利助、小田島桂香、大鳥居弁三、吉田半迂交々来訪。菊屋より円形端溪研を購ふ。筆筒老代りに遣す。午後、落合の莊ニ到り植木屋を督してきりしま白つ、じを植ゆ。夕刻帰宅。種村宗八来訪。小田島ニ骨董代廿五円の内二十円渡済。

二十三

曇天。早朝、墓誌修正の事ニ付牧野を訪ひ、菓子料十円贈る。吉田半迂、字割を齎らし来る。墓誌草稿を中村芳雄「七五ウ」ニ托し、日高秩父の揮毫を乞ふ。湯浅半月、種村宗八来る。表具屋より幅箱四個出来領手。十時より落合の莊ニ到り、昨日ニ引続き植木屋を督して園の手入を為す。在岩国賀田直治より来書。高橋義彦より来書。和田万吉、久須美秀三郎より来書。吉田半迂ニ字割修正を頼み、午後成る。愛犬、入院中の処本日帰宅。高橋義彦ニ答書を發す。在北海道和泉佳平より数の子を贈り来る。高木を訪ふて紫泥大土瓶「七六オ」を購ふ。

二十四

雨氣濛々たり。種村宗八、島田円成、吉田半迂来る。豪谷山水表具屋ニ改装を托す。下谷金杉ニ宗家主人を訪問し、内藤久寛を会社ニ訪ふて壱万三千五百円請取。邸宅買入金の内也。在高松松平伯より病状ニ付来書。午後、平山堂より壱万壱千円書画骨董入札代金の内受取。日清印刷会社ニ小久江を訪ふて明日家宅讓「七六ウ」受登記ニ

関する一切の事を打合せ、二万四千五百円交付す。越後高橋義彦へ細川幽齋書簡一卷小包にて發送す。

二十五

晴。後藤肅堂一身の件ニ付来訪。高田俊雄、大阪ニ於ける出版部の講演会ニ付来訪。落合の莊ニ到り、正午、学校ニ到り維持員会ニ臨む。本日、東五軒町邸宅購入之登記無滞済む。高橋義彦より来書。中禅寺発会津八一の絵はかき来る。小久江成一「七七オ」来訪、取引結了の仕末を報ず。内藤、増田、平山堂ニ書状を發して登記結了の事を報ず。移転通知状印刷、日清印刷ニ托す。電話、学校より譲り受、并ニ移転ニ付かけ替の事、種村ニ托す。移転費用として五十円、外ニ月末家費五十円、家賃三十円他諸費五十円内子ニ交付。

二十六

晴。高田俊雄、種村、吉田半迂、中村芳雄交々来訪。村島靖雄の紹介にて「七七ウ」川上邦基来り見る。日高ニ依頼之宗家墓表揮毫成る。日清印刷会社の重役会ニ臨む。午後、小野寺文哉を招き日高の揮毫を交付す。高橋義彦

より来書。小久江成一へ菓子并呉服切手三十円贈る。電話機学校より譲受の手続を為す。毛利宮彦、図書館建築案を齎らし来り云々す。日高翁へ揮毫料三十円、中村芳雄へ車代五円為持遣る。相見繁一ニ貸付の文晁絵日記戻る。午後三時、藤田宅ニ到り受授を」(七八才)了る。家族と共に間取を検す。喜代四家相を案し、若干模様替の案を立つ。今夜、児と藤井春之助宿泊、留守居をつとむ。湯浅半月、大石理円より托されたる書画帖ニ揮毫。久須美方へ人を遣し翠峰の画をもとむ。

二十七日

晴。久須美秀三郎より本間翠峰山水まくり二枚贈らる。菊屋、本田信教来訪。東五軒宅ニ到り朝来二人」(七八才)を役して庭園の掃除を兼ね、意ニ適はぬ処を模様を替へ、終日没頭、晩間略々了る。久須美へ謝書を發す。新居ニ多少の普請を要する所あり。右費用として二百円也内子ニ渡す。不在中、木村栄之助来る。小久江ニ新居長屋借家人、明日中立退の件、藤田ニ談判を托す。夜に入り明日の仕事日程を定。不在中、波多野精一來訪。

二十八日

晴。小久江成一來訪。表具屋へ久須美」(七八才)秀三郎より贈られたる翠峰マクリ二枚表具屋へ廻す。電話機譲受手続ニ付出版部員来る。豊国火災保険の松川松次郎來訪。五千円年十円(家屋)、家具三千円ニ付年九円の割にて保険加入の事を協定す。明日証書を作る筈。大阪阪大隈侯随行田中唯の書状到る。市島友松母の訃到る。早朝より新居ニ到り、吉田半迂を相手ニ庭の手入を為す。今日、三台の車を僦ひ数回往復約三分一の家具を運び了る。」(七九才)明日、愈々全部移転了る都合なるに、昂の居と定めたる長屋未だ明かす。前持主ニ数次談判。夜ニ入り嚴重の談判ニ及ぶ。本日、大工を招き便所浴室模様替其他ニつき大体協議を為す。不日着手の筈。

二十九日

晴。早朝より昨日ニ引続き家具を移し、夕刻迄三台の車数次往來す。長屋未だ立退かざる為め荷物の入れ場所なく玄關前荷物堆積す。多忙中、落」(八〇才)合の植木屋をして別荘よりカナメ二十株持ち来らしめ、終日樹石の入

れ換ニ努力す。豊国火災の松山^(ヤマ)松次郎来る。家屋五千円、家財三千円、前者は年十円、後者は九円にて保険契約を爲す。高橋義彦より平山堂へ仕払ふべき二千六百円郵送し来る。直ニ平山堂へ相渡す。長屋を立退かしむる件ニ付、小久江代人として島田円成、藤田と余との間往復す。移転通知を百枚發送す。今夜七時の急行にて井上辰九郎と共に大阪へ出發す。」(ハ〇ウ)

三十日

今朝八時大阪着。大隈侯夫婦外一行ニ会す。例のことく多数の校友しきりに来る。午時、高山圭三ニ招かれ井上と共に大阪俱樂部ニ午餐を共にす。山本知士より赤石焼擬鉄陶三足鼎式の香炉を贈らる。高田半峰、京都より来着。小川為次郎來訪。來月三日、同人の宅ニ到り其所蔵の書画を一覧せんことを約す。小久江成一、高橋義彦ニ書状を發す。今夜浪華中学ニ早稲田大学校外生の集会あり。高田氏と共に臨席、」(八一オ) 一場の談話を試み、引つ、き同所ニ講演会を開らき、余并ニ高田、井上辰九郎交々講演す。十時半閉会。帰宿後高田、井上と鼎座、対

酌酣醉。二時臥す。

三十一日

雨。八時起床。平沼淑郎、増子喜一郎、中学寄附金問題につき來談あり。侯爵、十一時発神戸ニ赴かる。天野、東京より神戸ニ直行。高田、京都へ去る。侯をして明朝朝日、毎日ニ新聞社を訪問せしむるニ付、余、両社ニ交渉。鹿田」(八一ウ) 静七ニ前回購入之書物代十五円五十錢払済。高橋義彦より二通の來書あり。大谷順作、後醍院正六、砂川雄峻來話。借家立退の件ニ付小久江成一より愈々六月一日と決したる旨報あり。大鳥居弃三、森脇、大久保の文明協會関係者來訪、会務ニ付協議の上、備後町河村(割享店)ニ抵り会の維持員山田^(ヤマ)村^(アキマ)□□外ニ相良忠道、岩男義臣と会の前途ニつき協議する所あり、深更帰へり臥す。今夜、天野為之着。桃木武平」(八一ウ) 外二、三の書狀到る。」(八一ウ)

※アキママ

特別
イ 4
1919
572

双魚堂日誌

大正六年
六月以降

双魚堂日誌

大正六年六月以降

六月

一日

大阪ニ滞在中。七時起床。桃木武平来訪ニ付、大隈侯ニ引合はす。浮田和民、京都より来着。家信ニ接す。砂川雄峻来訪。三日夜、砂川、小川、平田ニ高田、井上と共に某酒樓ニ招かる。高等商業学校より文明協会の講演を同校生徒ニ傍聴せしむる件ニ付云々の申込あり。」(オ)

翻刻『春城日誌』(二二六)——『双魚堂日誌』大正六年五月〜六月——

下村正太郎来訪。伏見一族主人の計を伝ふ。家信ニ接す。午後一時、鰻谷育英小学を会場として大日本文明協会の講演会を開く。余、開会之趣意を陳べ、浮田、大隈侯、井上辰順次講演。聴衆堂ニ溢る。午時閉会。前田惇より来書。六時より大阪ホテルニ於て大隈会長并ニ出張講師の慰労会あり。大隈侯の演説あり。侯、食卓ニ就かす去る。卓上、岡村司、天野為之、原田助、平沼淑郎及余の演説あり。来会者百五十名。帰宿後井上と対」(ニウ) 酌中高田、京都より帰来。午前一時迄鼎座して飲む。東京宅より長屋立退了る旨電報し来る。

二日

晴。家書到る。小久江成一より来書。朝来平田讓衛、大谷順作、山本知士、森脇等交々到る。又、増子喜一郎、中学募集の件ニ付来訪。海老友次郎より鯛の漬物壹樽を贈らる。午後一時、天王寺公会堂ニ文明協会第二回講演会を開く。浮田、開会の辞を陳べ、平沼淑郎、青柳」(ニウ) 栄司(工学博士)、星野行則(加島銀行理事)、井上辰九郎順次講演し了る。今次の協会の運動有効と感せら

る。夕刻より大阪ホテルニ於て大隈侯夫婦の名義にて天
盃拝受祝宴あり。近畿の校友并ニ中学実業両校の卒業生
招かる。会する者七百名。会衆堂ニ溢、総員起立。砂川
雄峻、謝辞を陳べ侯一場の演説あり。八時過ぎ宴了り、
高田、天野、井上、浮田、田中、増田、平沼と共に平鹿
ニ招かれ深更迄飲む。招きたる者は砂川、平田、小川、
岸本、高山」(三ウ)等在阪校友の先輩也。

三日

晴。今朝、大隈侯ニ面し政治論を聴く。四、五の来客あ
り。十時、井上同伴、小川為次郎を御影ニ訪ふて其の所
蔵の書画を観る。平沼淑郎、平田譲衛も踵て到り同覧、
午餐の饗を受け、平沼、平田先づ去る。余等兩人尚留ま
り鑑賞を耽る。今日展観の者抵ね宋元の書画ニして中ニ
日本書画数点あり。詳細雜記ニ載するを以つて略す。四
時辞し去」(三オ)り旅宿ニ一浴の後、小川、平田、砂川
ニ招かれ、灘万ニ飲む。高田、井上、平沼と余客たり。
親友の宴として特ニ興を覚ふ。

四日

今朝八時二十九分、大隈侯一行大阪を去る。余、高田、
井上と候を見送り、急行電車にて共ニ京都ニ赴き井上同
伴嵐山ニ到る。大阪より見送り之為来りたる山本知士も
従ふ。近來、千鳥ヶ淵の丘上ニ経営せる三友樓支店「千
鳥」と云ふに入り酒食す」(三ウ)偶々溪流ニ三、四の船
列をなして過るあり。前頭の一船僧を載せ経を読み、紙
片を水ニ流す。水上落花の浮ぶか如し。問へは「地藏流
し」と云ふ。これ迄見ざる嵐峽の行事也。食後去るニ臨
み降雨あり。傘を借り歩いて電車停留場ニ到り、四時木
屋町北大嘉ニ於て高田と会し鼎座酣酔。九時の急行にて
共ニ帰東の途ニ就く。

五日

雨。九時半、中央停車場着。高田と自」(四オ)動車ニ同
乗帰宅。宅の整理未成らず。家具狼藉、出発当時と異な
らず。大工日々来り一、二模様替の済みたる処あり。神
樂坂表具屋へ托したる金屏風修繕成る。并ニ康有為額、
豪谷幅出来。小久江成一、会社の件ニ付來訪、内談して

去る。今夜始めて新居ニ臥す。周囲家具雜陳、火災避難所の觀あるも、夜分の閑靜は宛然西京ニ在るか如し。終日雨収らず。今夜、大隈侯帰京。

六日

「(四ウ)

曇冷。朝、種村宗八、今井逸浪(逍遙紹介)、堤康次郎来訪。九時半より前島弥宅ニ日清印刷会社の重役秘密会を開き、渡辺問題を内議す。高田、増田、田中、山沢、小久江、前島と余。会議の末、本年九月会社の十週年紀念会を終ると共に社の組織を改め、渡辺を罷め余を社長ニ推し、一改革を図ることニ内決し、午餐後帰宅。山沢俊夫来訪あり。古池隼三、書画四、五幅を齎らし来り見す。本日寢室の押入工事略々成る。」(五オ)

七日

晴。早朝より波多野精一、小林堅三、吉田半迂、湯浅半月、新潟新報の川上法勵、八百板梅三、新発田新聞の小林節、広田金松等交々来る。内藤久寛来訪ニ付、邸内を一覽せしむ。物を贈らる。川上邦基来訪、釈尊像木彫を贈らる。後藤肅堂も踵而来る。岸至、出版部広告の件ニ

付来話。十時より日清印刷会社の重役会ニ臨む。第宅購入ニ対し市の特別所得税壹百十八円八錢納付了る。坪内大造結婚につき祝儀として金五円遣す。」(五ウ) 押入工事出来。雜然狼藉之具、漸く片つく。浴室の工事ニ着手、未成らず。

八日

晴。早朝、湯浅半月来訪。春水、栗山、象山の書簡卷を示さる。川上邦基、陶磁器研究之事ニ付来訪。二、三の添書を与ふ。岸至る、^(マ)実録全書の件ニ付来談。毛利宮彦、図書館構造の事ニ付来話。且乾漆瓦、当紋の茶托を贈らる。佐々木某、福山某又来る。大工佐藤吉五郎ニ昂の居室建増設計を托す。人を僦ふて庭」(六オ) 園ニ手入をなし、半日没頭す。

九日

雨。古池隼三より雲室蘭竹幅を購入。豪谷山水幅代と併せて二十円払済。昆田文二郎来訪ニ付、学校の紛事ニ付内話す。午後、雨を衝て日本橋俱樂部ニ到り、赤星家の売立を觀る。出陳書画、茶器総數三百点。流石ニ近古売

立の雄也。三百点ニて三百万円以上の価ありと云ふ。三時半帰宅。新潟校友会の件ニ付松井郡治より来電、直ニ返電を」(六ウ) 発す。廿七日日清印刷会社の株主総会通知書到る。

十日

雨。岸至、坪内大造来訪。朝来知友ニ電話をかけ十五、十六両日小宴を開く案内に没頭す。坪内逍遙、大隈信常ニ書状を發す。転居の祝物を受けたる五、六家へ挨拶として物を為持遣る。新潟校友会の件ニ付吉田東伍ニ書状を發す。終日家居雨を聴く、又一快也。時々傘を翳して前栽ニ鉢を入れる、亦一興。家人、狂と」(七オ) 呼ぶも妨けさる也。新潟松井へ發電、校友会講演出席者の件ニ付云々す。五月分歴史図録本日配達し来る。小田島、菊屋、高木(順)ニはかきを出す。今朝、中央大学全焼。図書館迄も災禍を免かれさりしと聞き痛惜禁し難く、奥田義人ニ一書を發して慰問す。

十一日

雨霽。古池津三、高田俊雄、吉田半迂、表具屋等来る。

前島男夫人危篤と聞き見」(七ウ) 舞状を發す。増田義一、坪内雄藏ニ書を發し、十五、六両日の小会ニ来会をもとむ。畳屋来り茶室の畳かへニ着手す。大工、座敷便所ニ塵出し窓を作る。近日人を招くニ付膳部其他の器具を検出す。午後、宗家の使として小野寺文哉来り、前日の先代の碑文を世話したる礼にとて三十円、移転祝として鰹節を贈らる。車夫を役して玄関前巨石を蔽ふアスナロ式本を抜き去り、他ニ庭園中多少の模様替を為す。新潟松井郡治へ發電、出」(八オ) 張教授既定分の外、服部文四郎往く旨を報ず。平山堂ニ托したる余の骨董売立十六、十七下見、十八日開札と決し目録を配本し来る。菱屋主人、鎌田妻等来る。佐藤吉五郎、増築図案を齎らし来る。未た可ならざる所あり。再考を求めて還す。

十二日

小雨。高木順、平田職康、田代亮介并ニ息憲介来訪。踵而小田島桂香来る。平田より香魚を贈らる。小田島、夜に至るまで」(八ウ) 居る。雨天ながら植木屋四、五人来る。先づ巨石を茶室の庭ニ移し、又、玄関前の巨石の位地を

変し埒を狭ばめ、車を容るゝの余地を作る外、壺、二庭園中の模様替を為す。畳屋来り茶室の畳換をなし未了。

大工、座敷手洗場の模様替をなし未了。大鳥居弃三来訪。高橋義彦、坪内雄蔵より来書。

十三日

雨風。本田信教、湯浅吉郎、菊屋（九才）来る。神楽坂料理屋梅月を招き十五、十六両日客を招くニ付料理を注文す。新潟松井郡治より来書、直ニ答ふ。宗家へ物を贈られたる謝状を發す。紀念事業の一部たる応用化学科教室設計図成り、委員会開会を要する旨、建築主任より通牒を受く。大隈信常より灘の醇壺瓶伊万里酒器壺函贈らる。午後雨霽、女兒と共に浅草ニ活動写真を觀、金田ニ飯してかへる。今日、座敷畳かへ了る。奥田義人より来書。

十四日

晴。小林文七来り二十円商品切手を贈らる。大工来り松の緑を取り、玄關前植込の埒を抜き去る。応用化学設計委員会の件ニ付中村康之助ニ書状を發す。内藤久寛ニ書状を發す。出版部の件ニ付岸至来る。高田、天野、塩沢、

両田中より移転祝として青木堂切手二十円贈らる。茶室側の飛石の位地をかへる。低地ニ地盛を為す等、本日にて手入一段落を報す。校務ニ付高田早苗より十七日朝集会の件ニ付来書。（二〇才）

十五日

晴。早朝、落合の莊ニ到り若干の物を齎らし歸へる。不在中、浅野赤城、賀田以武来る。小田島桂香来訪。美術倶楽部本日陳列済の通知を得たるニ付、桂香を遣す。午後、迎客の爲め半日掃除をつとむ。夕刻、内藤久寛、増田義一、池田竜一、小久江成一を客として宴を張り、九時半皆去る。中村康之助より来書。

十六日

「（二〇才）」

晴。田代英一より来書。田中唯一郎来訪、学校の幹部問題ニ付内議して去る。美術倶楽部ニ抵り、自家の売立列品を見る。午後、迎客の爲庭園掃除を為す。夕刻、大隈信常、高田早苗、坪内雄蔵、塩沢昌貞、田中穂積、田中唯一郎、昆田文二郎来会、小宴を催し酣醉。九時散会。

十七日

雨。今朝九時半、高田宅ニ学長交送の件ニ付、坪内、浮田、金子外三理事」(一七)と会し、結局高田の再起を決し、十一時浮田、坪内と共に大隈侯を訪ふて右の次第を報告し、正午帰宅。坪内より新刊脚本二種を贈らる。内藤久寛より使にて金壹百円領掌。午後みづを伴ふて外出、浅草辺ニ時を費し、金田ニ飯してかへる。

十八日

小雨。早朝、種村、小林堅三来る。天野を訪ふて、昨日高田邸ニ於ける学長交送ニ関する決定を縷述してかへる。川上法勵、本」(一八)田信教、小久江成一来話。又、平山堂利助、売立の件ニ付来訪。松井郡治ニ書状を發す。吉田東伍ニ書状を發す。美術倶楽部売立、本日開札ニ付二時過より行き観る。増田義一より麻の座ぶとん五客を贈らる。直ニ謝書を發す。和田万吉ニ一書を投す。夜ニ入り高橋義彦ニ書状を發す。

十九日

雨。田中唯一郎、山田清作来話。平山堂より電話にて昨

夜開札の結」(一九)果を報し来りたる内、半江青縁山水四千二百円にて落札とあり。好況驚くべし。貯藏銀行へ約束手形六十日間更らに割引を頼む。小林堅三、図書館の予算決算ニ付来訪。午後、平山堂を訪ふて売立計算を見る。売上高壹万〇三百七十參円五十二錢、此内二割制規の手数料引正味八千二百九十八円八十一錢也。外ニ高橋義彦入札前ニ引取りたるもの貳千五百円の内壹割平山堂へ遣すとして、正味貳千二百五十円、」(二〇)合計壹万〇五百八十八円八十壹錢也。これを平山堂出金の壹万壹千円より控除すれば差引四百五十一円十九錢、外ニ平山堂売立前の出金の五千円の利子壹百円を加ふれば五百五十一円十九錢不足の処、品として平山堂の手ニ存する者約百二十点あり。不日評価之上計算して此不足を補ふ筈也。和田万吉より来書。鳥井諦次郎を学校の賛助員と為す件ニ付、松井郡治より来書。」(二一)佐藤吉五郎、増築の件ニ付来る。

廿日

雨霽。種村宗八、大橋篤之、篆刻家服部耕石、小林堅三

来訪。和泉文三より此程生れたる女子の写真を贈り来る。祝として鰯節を贈る。午後一時登校。二時より余委員長として大典記念事業の内応用化学新設々計ニ関し多時討議、大体原案を決す。学長更迭問題ニ付、今朝二、三の新聞紙ニ云々の記事出で、急ニ高田宅ニ吾等元老」(二三)之會議を開く事と成り、八時より行く。種々議論の末、高田の学長復職は早稲田出身の代議士の切なる請求を容れて見合ふこととし、改革委員長と云ふ資格にて改革の衝ニ当らしめ、天野辭職の上は塩沢就任の事ニ内定。一時過漸く退出す。高田邸ニ在る間ニ早速整爾、小山松寿、吾等を訪問し来り、早稲田出身政治家の代表的意見を陳述せり。当夜高田邸ニ会するもの、坪内、浮田と余の外三理事も参会せり。」(二四オ)

二十一日

雨。早朝、大隈侯を訪ふて、昨夜高田邸相談の結果を報告、旁学校の諸般の事ニ涉り話す。侯よりも種々の談あり。九時学校ニ於て二十数名の教授を応接室ニ会し、余より天野学長辞任并ニ善後の件ニ付詳細陳述する所あり。

続出の質問ニ対しても、余主ら之れニ答へ、十二時ニ到り吾等の提案を是認することに決し、直ニ坪内、浮田、并ニ三理事と共に早稲田倶楽部ニ赴む。時已ニ」(二四)之午後一時。喫飯後、招き置きたる評議員二十数名ニ対し、教授会ニ於て陳べたると大要同断の事を陳べ、三時間ニ涉り諸般の質問ニ答へ、結局皆々同意を表するに至り散会を報す。五時より日本倶楽部ニ佐藤孝三郎名古屋市長として就任を祝する為同人二十数名会合、余も出席す。新潟松井郡治ニ發電、吉田東伍病人ある為出張出来兼ねることを報す。其答電を接手す。賀田直治より転居を祝するため萩製大」(二五オ)花瓶一、鰯節を贈らる。関太郎より麦酒壺打を贈らる。不在中、稲葉岩吉来訪。

二十二日

雨。久須美秀三郎より来書。紫安新九郎来訪、移居を祝し呉服切手(五十円)を贈らる。坂口五峰来話。金融の件ニ付高田ニ書状を發す。吉田東伍来訪、新潟行を諾す。其旨松井へ報す。昆田文次郎来話。正午学校ニ到り、臨時維持員会を開らき、現学長辞任ニ付、後任を決する前、

高田」(二五ウ) 名誉学長ニ嘱して、学校改革案を立てしめ、

然る後学長の後任を決すべしと余より提議し、一同異議なく高田も承諾の旨を陳し散会す。一昨日来努力の結果、一断落を告げたるにより帰宅後旅装ニ取りかゝり、八時の上野発夜行にて服部文四郎同伴、新潟へ向け出發す。發するに臨み平山堂、和田万吉ニ書狀を發す。同行中、日清生命の岡安理平も参加す。

二十三

「(二六オ)

晴。九時三十分新潟着。多数の校友出迎ふ。直ニ篠田旅館ニ入る。先着の大隈信常、坂本三郎ニ会す。校友多く訪問し来り応接ニ忙殺せらる。午餐後、新潟新報の山田穀城を招き、近かく新潟新聞と題号を復旧する際ニ、紙上ニ連載すべき余の新潟新聞在社時代の旧懷談を二時間余筆録せしむ。五時より行形亭ニ校友大会を開く。六十余名来会。席上余学校の近状特ニ近日之出来事ニ付報告、演説をなし、酒」(二六ウ) 宴ニ移り、又一場の演説を試む。鍋茶屋ニ転飲、午前一時帰臥す。

二十四

晴。佐藤伊助、山口連太郎、高橋義彦、久須美秀三郎、林静治、桜井市長、校友四、五来訪。応接ニ忙殺。午後一時、高等師範学校講堂を会場として講演会を開く。余、大隈信常、坂本三郎、服部文四郎、吉田東伍順次講演。余、講演後先づ旅館ニかへり、広井一、山田穀城を招致し、新潟新報の請ニ応じ、余の」(二七オ) 往年新潟在留間の越後政史を口授筆録せしめ、約四時間ニ涉り高田事変以来、大隈伯条約改正蹉跌の処ニ到り一段落を画す。余、先年新潟新聞紙上、余の新潟県ニ於ける政歴を筆記、登載せしめしことあり。而して今次は、それに比すれば一層委曲を悉す。今夜、一行官民有志ニ招かれ鍋茶屋ニ飲む。知事外高等官皆来り会す。宴了り、別席ニ大隈信常主人となり、県官連を招待す。余等も与かる。県官より、又席を行形」(二七ウ) ニ移して答礼の会あり。外ニ鍋茶屋ニ余の友人等の小会あり。それにも出席、多忙を極め十二時漸く帰臥。真島信城より一書来る。明日、余のためニ一会を開かんことを云々す。明日出發ニ付辞す。

二十五日

雨。手島、坂田（同宿）出発ニ付五時起床、見送る。今朝八時、久須美秀三郎の勧めニ依り、白山浦より越後鉄道ニ乗り車中款待を受け、柏崎着後亦午餐」(二八)の饗を受け、三時軽井沢行の汽車を待受け、久須美ニ別を告げ一行柏崎を発す。偶々内藤久寛、直江津迄同行するニ

会す。今夕、軽井沢ニ一泊、翌朝近かく竣成せる大隈侯の別荘を觀、又其の附近ニある学校の用地をも檢せんと期したり。軽井沢ニ到着せし時は十一時ニ垂んとす。東京より侯の別業并ニ学校の用地ニ特殊の關係ある野沢組主人并ニ坂本嘉治馬、東京よりわざと来りて停車場ニ迎ふ。偶々東」(二八九)京大隈家より当地留置の電報三通あり。皆な信常の生母の死を報する也。於是今夕一泊の予定を變し、一時過ぎの汽車を待受け急ニ帰京と決し、其

の間ニ侯の別業を檢せんとし、野沢の自働車(トイ)を驅り十四、五町を行き、既ニ竣成を告げたる三層壹百十坪の建築を一覽す。材は総て台湾桧材にて間取は面白からされとも相応之建物なり。蓋し野沢か侯のためニ自費を以つて造

営せしもの也。此の別業ニ附屬する土地三千」(二九)坪、これ又野沢の侯ニ獻する所也。学校か鴻池并ニ原田より寄附を受けたる二万坪の地は侯の地と相接す。暗中燭を掲けて一端を觀。勿皇自動車(トイ)を驅り將さに發せんとする汽車ニ投し一睡。

廿六日

午前六時上野駅ニ着す。大隈家より出迎の自働車(トイ)ニ同乗、家ニかへる。家人報す、余出發以來梅霖連日、今日初めて晴を得たりと。大工佐藤吉五郎」(二九)来り増築工事の打合をなす。茶室用大棚代価二十五円払済。小田島彦太郎來訪。午後、酒後録七、八枚筆録。図書館協會廿九日地方会開会の通牒ニ接す。不在中、出版部より二百円借入。村井銀行期限之約手決済。

廿七日

晴。種村宗八、湯淺吉郎、毛利宮彦、瀬川光行、小久江成一、藤山茂実、福山政一等来る。日清印刷より謝金三百七十五」(三〇)円贈らる。四百円銀行へ預く。並木より移転祝として幽谷傲南蘋果を贈らる。表具屋ニ托した

る杏坪額改装并ニ翠峯二幅出来。内雪景一幅表装中回復す可らざる汚損を生ず。惜しむべし。植木屋来り茶室前ニ終南天二株を植、漆一株池辺ニ植。滝の水路を直しセメントを施す。午後、平山堂を訪ふて残品処分を秋季迄延はす事ニ協定す。下谷笑福亭ニ日清印刷会社重役の宴会あり、出席酣醉。高田、田中と自動車ニ同(二〇ウ)乗帰宅。

二十八日

晴。払曉、富塚格治急報ありとて来り訪ふ。何事かと問へば、昨夜、吉田半迂、富塚方にて急病を發し死すと聞き驚愕す。小林堅三を招き死骸引取、葬儀方の事を依頼す。未亡人来訪。今日、植木屋三人来り、後園茶室牆外の樹木十数を他へ移し、近日増築の地を為す。関太郎来訪。新潟竹山氏より来書。内藤久寛へ小包にて書簡三卷發(二二オ)送。新調の風呂出来、本日より使用。大阪松糸より過般の勘定書到来。江部淳夫岩国發はかき到る。夜来驟雨あり。日清印刷会社配当通知来る。

二十九日

晴。帝國通信社より謝金三十五円贈らる。吉田半迂葬式明日と決す。葬儀費として十円、外ニ香華料五円遣す。本野子爵母死去ニ付悔状を發す。昆田文次郎、岡安理平、樋口清策、坂口五峰、菊屋、広田交々来る。坂口と午餐を共に(二二ウ)す。新潟旅館篠田より塩引耆尺を贈らる。湯浅吉郎来訪。植木屋三人来り、長屋の牆根を縮少し余地を作る。午後、高木を訪ふて若干の払を為し、且物を購ふ。学士会ニ図書館幹部員と会食し、故坂本四方太のためニ金十円和田万吉ニ交付す。多嘉羅亭ニ書画大觀の編纂会を開らき、黒板、中川、萩野、和田(英松)等と協議、深更帰宅。

三十日

―(二二オ)

小雨、後晴。早朝、吉田半迂の居を訪ふて其の遺骸ニ対し焼香をなす。今日九時半、葬儀執行之处、十時学校ニ重要な会議あり、行き難きニ付去つて落合の莊ニ到り、直ニ学校ニ引かへし維持員会ニ臨み、予算決算議了の後、高田より学校内紛ありと世間ニ謳はる、その源泉と責任

ニつき天野ニ云々する所あり。それか端緒にて余よりも天野ニ勧告する所あり。終ニ天野と余の間ニ激論を生ずるに至り結局、天野は愚痴をならべたるのみにて」(二三)何等の決定を見ずして、午後二時散会す。山形の伊藤徳太郎より果物を贈らる。増子喜一郎来訪。校務ニ付多時話して去る。山田烈盛の訃到る。信常生母葬式ニ付代人を出す。

七月

一日 日曜

早起。図書を整理す。高木方へ不用品為持遣る。表具屋勘定皆済。平山」(二三)堂石灯籠を購ひ、庭中澁の水路ニ沿ふて置く。赤堀又次郎、浅野赤城、斎藤庫四郎、坪内大造来る。客去る後、みつを携へ神田辺ニ物を購ひ、終ニ浅草之活動写真を見てかへる。寝後、橘静二来り、校紛ニ付云々す。結局一案を齎らし自動車を駆り、先つ高田を訪ふて余の案に同意を求め、更らに浮田和民を訪ふて同様同意を得。終に坪内を訪ふて二時間ニ渉り談論、

これも結局余の意見を納れ、宅ニかへる。時ニ午前三時也。」(三三)

二日

晴。今朝、田中唯一郎を招き昨夜の事を報告中、昆田文二郎も来訪。余より内部の事情を詳述し、田中と共に高田を訪ふて、愈々余の案ニ基き大隈総長に請ふて裁決を得るの外なしとして、高田より総長ニ請ふこと、なる。

其要旨は校友有志、現状維持を主張すれども、理事中職を辞するもの二人あり。到底現状維持行はれず。天野をして随意ニ幹部を組織せしめんとするも、少壮教」(四)を授団体、天野を推戴せず。事情ニ通せざる校友は行くく益々誤解ニ誤解を重ね、終には校友と教授団体の間ニ睽離を生ずるのみならず、高田をして教授団体を指喚するなど、云ふ誤解も起り兼ましき傾向あるにより、總裁より高田、天野、坪内の三人を後援とし、後進者を学長ニ推薦せしむるを以つて一段落を告ぐるを尤も穏当なりとし、扱而学長には塩沢を挙げべく、之れニ教授団不同意なるも、それは鎮撫すべく」(四)理事には坂本

三郎を推すと云ふことに内決し、総裁より明朝学校幹部と校友委員とを別々に召集、言ひ渡さる、都合ニ高田より請求の都合也。在郷北堂へ例年の通金十円、外ニ反物等贈呈。山形の伊藤徳太郎、真島信城ニ書状を發す。高田、大隈侯訪問之結果、すべて賛成せられたる旨、電話にて報あり。大隈家より午前十一時來邸せよとの案内来る。右ニ付一書を坪内ニ投す。佐藤吉五郎ニ増築費の内金として」(二五ウ) 金五百円也渡す。夕刻、高田宅ニ理事と共に会し、学長問題ニつき再議、終ニ維持員阿部磯雄、坂本三郎、中島半次郎、金子馬治、増子喜一郎等を急ニ招き種々協議の末、学校憲法を改正し学長を選挙するの法を定め、爾後の学長は選挙ニより定むべしと決し、十時帰宅。校友三名と云ふ署名にて、余ニ脅迫状を寄せ来る者あり。卑劣漢の爲す所一笑ニ値せず。夜來雨あり。」

(二五ウ)

三日

雨、後晴。早朝、田中穂積來訪。昨日、高田邸ニ決定之学長公選の非なるを云々す。前夜、余も略々同論なりし

か故ニ先づ余ニ図る也。終ニ高田邸ニ田中穂積、塩沢、浮田、田中唯井ニ余会合の上、前夜の決定を翻し、一昨宵、余、高田と協定の案ニ戻りたるも、校友ニ対する遠慮より一たび天野ニ遣らせるかなどの軟論、高田より起り塩沢擁立は困難ニ陥りたり。十時登校、坪内と」(二六ウ) 話し、総長侯の召ニ応し、高田、天野、坪内、浮田、余并ニ三理事行く。侯より学校の近事につき懇談あり。高田坪三人熟議の上解決すべしとの命あり。踵て校友委員、又総長より懇談を受け、五時より例年の評議員会を開らき、会食後散す。

四日

小雨。幅棚出来。小林堅三來訪、半迂死後の件。遺族、仕末の事ニ付來訪。校友高木貞雄、学校之紛々に付來話。十二」(二六ウ) 時、高田宅ニ三理事と共に会し、高田より昨日総長邸ニ於て三人会議の内容ニ付報告あり。前夜会合の維持員の來会を待合せ打合を了して、三時帰宅。佐野友三郎より來書。

五日

風。佐野友三郎ニ答ふ。賀田直治妻危篤の報あり、内子行く。増田義一、松井郡治ニ書状を發す。田中唯一郎來話。午後より落合の莊ニ到り直ニ帰宅。本日、例年通り卒業式あり。事故あり臨ま^(二七)ず。園游会にのみ行く。散会后、三理事と共に高田邸ニ会す。天野より制度改革後、学長再任を望む旨、高田迄挨拶あり。右ニ付制度改革の事并ニ天野より提案の調査委員の事等ニつきし時迄協議す。来九月、天野再任の日、余、図書館長并ニ大典紀念委員長を辞すこと、田中唯も理事を辞する事を決す。

六日

雨、又晴、後風。田村又六、吉田東伍來^(二七)話。土田亦次郎より新発田新聞三千号ニ付寄稿を要め来る。午後、閑を得て家什を整理す。五時、築地精養軒之校友大会ニ臨む。昨今学校の内紛ニ付、天野学長より軌道を逸したる言説あり。会場騒然たり。余等、沈黙を旨とするもの傍觀するに堪へず。食堂を開く前、田中唯を拉して

富貴樓ニ飲む。塩沢、浦部踵て到り深更家ニかへる。

七日

「(二八)

風。今朝、宿醉を覚ふ。浅野赤城外一、二来訪の客ありしも謝して遇はず。橘静二、学校の件ニ付來話。踵て昆田文二郎、池田竜一亦学校の件ニ付來訪。論議十二時ニ到り皆去る。日清印刷会社の重役会ニ臨み、一時、高田邸ニ維持員を会し、昨夜の天野の態度并ニ学校改革ニ調査委員を挙げべしとの校友会の決議ニ付協議。結局誤解を避くる為すべて天野の要求通りなすべしと評定す。会議中、「(二八) 大山郁夫、宮島、村岡、橘外一名(所謂プロテストタントの綽名ある者)、余を訪ひ來り、天野の再任は学校を亡ぼす者なりとて、昨夜來のことを憤慨し種々談する所あり。余よりは維持員の評決を報じ、四時帰宅。

八日

晴、風。坂口五峰、小久江成一、並木覚太郎、山田東洋來訪。東洋より自製の陶器を贈らる。学校の紛擾ニ付、大山、宮島、村岡、橘外一人來話。博文館より「(二九)

創立三十年紀念として物を贈らる。午後、昆田文次郎を訪ふて学校の事を話し、二時、坪内逍遙ニ招かれ歌舞伎座ニ牧の方を観る。偶々場内ニ金子馬治、中島半次郎と会し、七時半相携へて自動車を駆り、余の宅へ伴ひかへり学校の事、就中明後日の維持員会ニつき協議中、田中唯、坂本三郎も来会。十一時迄凝議し、明朝更らに余の宅ニ維持員の大部分を会し、熟議すべしと決して別る。」

(二九ウ)

九日

晴。越後の少年石山九五一、歌右衛門の門ニ入り俳優志願ニ付、逍遙ニ介し歌右衛門へ紹介を頼む。丁酉銀行約手期限ニ付更らに六十日間割引了。湯浅吉郎、高木順来る。高木より紫泥の急須を贈らる。九時より坂本、田中唯、田中穂積、増子、金子、中島の維持員来訪。昨夜協議の事を再議し、大要昨夜の通り決定し、十一時、余、両田中、坂本同伴、高田を訪ふて其同意を得。明日の維持員会ニ提案せんとする学校」(三〇オ) 憲法案を内議して帰宅す。松井郡治より来書。電話料済。医者薬価、薬札

二十五円内子渡。新潟出張勘定決済。晩間、坪内逍遙来訪、学校の紛議を協議し、晚餐を共にして別る。

十日

晴。毛利宮彦、図書館設計ニ付来話。十時より維持員会出席の為登校。恩賜館ニ於て開会。先つ高田より校規改正案を提出す。右ニ関し天野より維持員と同数の調査委員」(三〇ウ)を教授并ニ評議員より各々互選せしめ、維持員と共に調査せしむべしとの提案あり。これニ対し異論盛んに起り、兼而内議し置きたる余の案、即ち維持員会は決定権を有する者なれば、他の二団体と申しからず。調査委員ニ加はる可らずと云ふニ決し、教授、評議員よりは各十名つ、互選せしむべしと決し、午後二時散会す。けふは重大の会議ニ付出席者多く、何れも気色ばみたり。余は此日黙すべき心組」(三一オ) なりし処、議論往々徹底を欠くの憾あり。終に二、三回発言す。大隈信常、三枝守富、高田、坪内と内議する所あり。散会后、坪内と共に其居を訪ひ、近く写したる小照を貰らひ受けてかへる。

十一日

晴。湯浅吉郎来訪。鎌田松造、日本銀行新潟支店へ出納主任として明後日赴任ニ付来訪。新潟各方面へ紹介名刺を与ふ。松井郡治へ鍋茶屋仕込金若^{三二ウ}干を郵送す。新潟校友会より過般新潟ニ同写の写真を贈り来る。石塚三郎より来書。落合より植木屋を招き庭園ニ手入を為す。晩間、女兒を伴ふて神田ニ物を購ひ、風月堂ニ酒食してかへる。学校より校規草案ニ附帶し、十三日朝維持員会を開くの通牒来る。

十二日

晴。今朝、高田邸ニ坪内、浮田、塩沢、両田中、金子と共に先つ到る。高田より一昨日総長を訪ふて爾後之顛末を報告し、天野再任の日、理事選任を誤^{三三オ}らざる様、総長ニ注意したる結果として、総長は永井柳太郎を召し、今回の事は高田、坪内、天野ニ任せあるに、要もなき内部の運動を為すを叱責せられたること等ニつき報告あり。昨今、天野か益々横暴の拳ニ出るニ付ては、前途寒心すべきものあり。如何にすべきやと云ふの問題

につき衆議、天野不信任を憲法制定前ニ鳴らし之れを総長ニ訴へ、一同進退を決すべしと云ふニ傾きたる。中にも、近日旅行中より帰京の浮田尤も硬論を主張す。増子、後れて^{三三ウ}到り又別ニ一論を立つ。結局明日午後、余の宅ニ会し、再議するに決し、差当り明日維持員会ニ臨み、憲法草案ニ対する懸引を協定し、二時帰宅す。本日、高田邸ニ会する者十八名の内、余、田中^{二一人}、増子、塩沢、金子、浮田、坂本、中島の九人なり。坪内も来りたれど、高田と坪内をして特ニ席を避けしめたり。他日の為め両人の余地を存し置かん為也。夜来、増子喜一郎来訪、校紛ニ付長時間話す。寝後、高田より特使来り書簡を領掌す。^{三三オ}

十三日

晴。新潟中谷正雄の母来り、同人の早稲田在学中保証を托さる。早朝、高田を訪ふて昨夜増子と協議の事を云々す。偶々金子馬治、余を訪問し来る。金子を説くに昨夜の協議の次第を以てす。金子同意也。九時より学校恩賜館ニ維持員会を開く。改正校規ニつき逐条討議す。天野

より終身維持員を刪去の提議出づ、成立せず。衆議、維持員五十名の原案を四十名と改む。十六日再会を約し、「(三三) 嘯時散会。浮田和民、天野不信任を理由とし辞表を提出す。一時より維持員、余の家ニ会し、昨日高田邸ニ於ける協議を引きつゝ、き研究し、結局、天野再任を非とし、辭職の意を決して大隈総長ニ其非を訴へ、総長をして天野を罷めしむることに内決す。此日来会者、塩沢、金子、浮田、両田中、中島の六名なり。四時一同去る。

本日決定の案は、天野を永久学長たらしめざるか否やニ関し、六名と余の進退も亦これニ繋る。実ニ重大の事也。本」(三四) 日欠席の阿部アベノ増子、坂本と協議の上、愈々右ニ決せば、高田と協議して総裁侯ニ訴ふる手筈也。学校の紛争、稍々極度ニ達す。必竟、天野モツツを率へて、維持員会の改革の議を竊み却つて其利器を以つて維持員ニ臨み、現存の維持員会を破壊せんとする反動のみ。

十四日

晴。今朝七時、両田中と共に高田を訪問し、昨日余の家ニ会したる維持員協議の結果」(三四)を報ず。高田は天

野不信任の決意は、憲法実施迫るの時を俟ち發表すべしとの意見にて、吾等の意見はそれ迄待つは先方の形勢愈々成り、吾れニ不利なりと云ふにありて終ニ不調ニ歸し、更らに本日一時より余の家ニ再開、再議と決し、十時帰宅。田中唯一郎裏書にて金貳百円也、村井銀行より手形割引を了す。期限九月十一日也。昨年来出版ニ苦心したる近世実録叢書、本月より配布の都合にて第一回(第二冊)出来。大阪松糸へ先頃下阪の節之」(三五)勘定廿五円送付了る。一時より余の宅へ金子、両田中、中島、増子、塩沢、坂本来会ニ付、先づ今朝高田と交渉の結果を報告中、高田も来会。種々議論を戦はしたる末、衆論憲法改正の結果、天野を学長ニ仰くこと已むを得すとすれば、寧ろ職を辞すの外なしと云ふに傾き、其時機ニ就ては高田論、九月開校の時を俟つべしと云ふにありたれど、高田去る後九月を待ては徒らに学生を騒動せしめ、穩当を欠くの嫌あり。」(三五)寧ろ急ニ辭意を決し、高田ニ通告を発すると共に大隈総長ニ天野を戴く能はさる理由を以つて辭職を申出つべし。其の時は両三日内と

密議し、夕刻皆去る。時局ニ対し犬死を免かる、一策は唯たこれある耳。

十五日 日曜

晴。四時起床。朝食後、つを伴ふて落合の莊ニ到り、繁茂せる草木ニ手入れをして備さに暑氣を覚ふ。十一時、
〔三六オ〕 去つて電車ニ乗り品川を経て新橋ニ下車し、銀座街頭ニ物を購ひ、松喜樓ニ飯して二時帰宅。外出中、田中唯、塩沢、昆田來訪。函根發淺野赤城の絵はかき到る。浮田和民より來書、進退ニつき云々す。増子來り長時間話して去る。踵て昆田文次郎、夜に入り塩沢昌貞來話、皆學校之問題ニ関す。不在中、小田島彦太郎來訪。

十六日

〔三六ウ〕

午前晴。午後驟雨あり、雷と、ろく。早朝、大鳥居奔三、小林堅三來話。踵而波多野精一來訪。校紛ニ付天野を學長ニ再任するの非を云ふて去る。九時より登校。恩賜館ニ於て校規の逐条討議をなし、十二時過議了す。尚、確定議迄ニ教授、評議員より選出の各十名の委員ニ附し調査せしむる筈にて、今日議了の案は其の原案也。一時よ

り余の宅ニ浮田、坂本、塩沢、両田中、中島、金子、増子、阿部^(マヤ)來會。昨日ニ引つ、き進退問題を議す。先つ浮田は昨日大隈總裁ニ^(マヤ)〔三七オ〕 単独辭表を呈したりとて其報告あり。種々凝議、増子ニ異論ありたる外、何れも昨日の決意を固執し、明朝八時、侯爵を訪ふて決意の次第を披露し、天野の再任を阻止せんことに内決す。但し此事は、大隈侯ニ面接迄は高田、坪内にも知らしめざることを、爾後には余は高田、金子は坪内を訪ふて顛末を報告することに打合せ、五時皆去る。

十七日

〔三七ウ〕

今朝七時半、昨日申合の如く、八名連袂大隈侯を訪ふて校紛ニ関する意見を陳せんとす。侯、偶々鍋島侯訪問の約あり、面會を得ず。午後一時再訪、日本座敷ニ於て大隈父子ニ面し、先づ田中穂積より口を開らき、天野が野心家ニ擁せられ、近來為す所往々軌道を逸し、將來誠ニ寒心すべきものあり、學校の爲めに此人の再任を不可とする旨を力説す。余、又傍らより補ふて基金募集の事は侯ニ責任あること、^(マヤ)〔三八オ〕 學校の紛議は寄附者ニ不信

用を博するの危険ある事、天野を擁護する野心者流は漸く形勢を造成し来り、今後一ヶ月を経過せば侮り難きものあらん。禍を除くは今の時ニ在り。一日を遷引すればそれ丈面倒を深ふす。天野をして再任を断念せしむる尤も急を要すと論し、侯も首肯せられ、順序として高田、坪内、天野を招き断する所あるべしと挨拶あり。それにて侯ニ別れ、信常氏と云々の事を打合はせ、金子は坪」
〔三八ウ〕内を訪ふて今日の事を報し、余は田中唯と高田を訪ふて顛末を報せんとす。而して高田不在の爲め、明朝訪問ニ決して帰宅。日清印刷会社より土地購入之節借入金四千円の利子半季分壹百六十円也、本日払了。植木屋一昨日来る。庭の背後の手入を爲す。小久江成一来話。

十八日

朝来細雨霏々。植木屋庭樹十二本を運び来り。昂の爲め近かく普請」〔三九オ〕ニ取か、らんとする地区ニ庭を作る。朝餐後、田中唯一郎来訪。同伴昨日大隈侯訪問の仕末を高田に報せんとて大隈邸ニ在る同人を訪ふ。偶々坪内も単独侯ニ進言せんとて来り会す。高田は昨日余等の進言

ニ対し諮問の爲侯より招かれ居るなり。余より詳細高田ニ報す。高田、愕然不興の体にて余との間ニ多少の議論あり。坪内、傍らより余を援く。議論果てさる内、坪内先つ侯ニ謁せん爲め去り、高田も亦侯の室ニ入る。余、其の顛末を聴」〔三九ウ〕かんと欲して待つ。偶々塩沢、増子来る。踵て電話を以つて招致の結果、田中穂積、金子馬治、中島半次郎来り会す。高田、坪内、侯との会見の模様は、要するに侯の意氣、昨日余等会見の時のことく豪ならず。蓋し善後の策成らざると高田の進言ニより侯ニ躊躇の状あり。余等聴て不満を覚ふ。来会一同、午後迄凝議す。終ニ決する所なく、高田、坪内ニ別れ一同余の宅ニ会し、協議の末飽まで決意を行はんと申合はせ、坪」〔四〇オ〕内を経て侯并ニ高田ニ余等の意を致さんと擬し、一同坪内を訪ふ。坪内、辞して聴かざるに依り、一同夜に入り自動車を駆り高田を問ふて、決意の次第と到底天野を黜くるにあらざれば学校を誤ることを言ふ。高田も略々余等ニ同じ、其の請ニ応し十日間の猶予を与へ、其間ニ善後策を案せしめ、案成る上は侯ニ断行を進言せ

んと言ふニ任せ、十時一同退出す。新潟新報より半季の考課状を送り来る。本日、日清印刷の重〔四〇ウ〕役会あり。多忙の爲め行く能はず。

十九日

晴。今朝、坪内雄蔵来訪。昨夜来熟考、辞意を決したりとて、其理由を云々す。金子馬治、田中唯を招致し坪内より決意を示し、余の宅ニ辞表を認め携帯、総長ニ提出するに至る。坪内来話中、牧野謙次郎来訪。学校の紛議ニ付、山県元帥より手を廻はし居るの秘事を話し、今日の場合、断の一字あることを云々〔四一ウ〕す。小田島桂香来訪。近かく越後ニ於て得たる銅印三顆を示さる。購入れて家什とす。吉田半迂死後三七日ニ当り未亡人挨拶のため来る。新潟発鎌田松造の書状到る。午餐後、内藤久寛を会社ニ訪ふて話し、又、昆田文二郎を古河の会社ニ訪ふて校紛を話しかへる。五時三十分、賀田直治妻喜久死去の報あり。内子、夕刻麻布宅へ見舞ニ往く。

二十日

〔四一ウ〕

晴。達磨屋五一子孫より近刊五一の遺稿を贈り来る。高

田より来書あり。時局を拾収するの意見を陳べ来る。踵て高田より電話にて面会を需む。乃ち行く。高田の案は先づ大隈総長より一応天野ニ再任を断念すべしと勧告し、聴かすんば維持員会は其の権能を以つて学長罷免の決議をなすべしと云ふにあり。これニ就ては、昨日総長と打合ありと云ふ。尚、維持員会開会の時日、同会ニ多数を制する方法等を打合せ、高田は国府〔四二ウ〕津ニ赴む。九時半、日清印刷会社ニ赴き、前田幹事を招き、今夕開会の校友会幹事会ニ臨み、天野会長か幹事の存するニ拘らす之れを無視し、廿五日擅まゝに臨時校友会を開くの非、并ニ其他近日指名されたる選挙方法委員の越権等につき、今夕幹事会ニ行ふべき件々を打合せ、余は出席せざる事とす。踵而印刷会社の重役会ニ臨み、一時帰宅。浮田、両田中、金子、坂本、中島、塩沢来会。高田の意見、坪内の辞任、其〔四三ウ〕他につき余より詳細の報告をなしたる後、維持員会の決議を行ふニ付ての諸般の打合をなし、五時半散会す。坪内逍遙より新刊「牧の方」を贈らる。

二十一日

晴。早朝、湯浅半月来訪。藹山の粉本一卷を贈らる。阪田貞一を訪ふて学校の紛議ニ付維持員辞任を請ひ、其承諾を得。坂本三郎を訪ふて、昨夜来余の案出せることにつき協議して去る。」(四三オ) 今日午後より余の宅ニ会合を必要とし各員を召集す。昨夜、早稲田出身議員委員を天野へ派し、嚴談の結果并ニ校友幹事会の模様を前田多藏、浅川保平より聴く。天野の暴ニ憤慨するもの続出の傾向あり。賀田直治方へ人を遣し香典(五円)、蒸しもの壺函を贈る。一時より余の宅ニ浮田、両田中、塩沢、坂本、中島来会につき、今朝坂本と協議したる件ニ付再議す。結局、昨日の案の如く決す。田中穂積立案の仕末書を回」(四三ウ) 覽す。四時散会后、増子喜一郎来訪。踵て金子馬治来る。金子は本日会合の結果を聞き、破れたる余の案ニ同意を表し、結局明日更に再議すること、なる。

二十二日

晴。八時、家を出で芝愛宕町青松寺ニ到り、賀田直治妻

の葬儀ニ臨み、帰途神田辺ニ圖書を購ひ、高木方ニ一、二の物を購ひ、風月堂ニ飯して帰宅。外出中、寺尾元彦来訪。一時」(四四オ) より浮田、両田中、塩沢、坂本、中島、金子来会。昨日協議の事を再議し、多少の修正を経て、昨日の通り決定。明日、余と田中唯、大隈総長を訪ふて廿五日、天野を招致の上、辞職勧告の事を頼むこと、廿六日吾等袂を連ねて天野ニ辞職勧告をなすこと(侯の勧告を容れざる場合ニ於て)、それにも応せざる時は廿七日の維持員に於て学長解任の決議をなすこと、これ決定の要点なり。天野の学長を解職と共に三名の理事の辞任を許可する事、同時ニ新」(四四ウ) 理事を決定する事、校規ニ付ては研究を審重にするため、徐々進行の方略を取ることも、此日の会議にて決す。在国府津高田より来書あり。除名決議の非なることを云々す。余の案も外部の反動を避くるため可成弾劾的辞令を避け、穩当なる理由の下ニ解職決議をなすこと、これも衆の同意する所なり。熊本江部淳夫より来書。毛利宮彦母より来書、且物を贈らる。夕刻、在国府津高田より通話あり。天野、

(四五才) 明日高田訪問の由を報す。右ニ付当方協議の大略を報じて高田の参考ニ供ふ。

二十三

晴。今朝小閑を得。蔵幅若干を出し虫干をなす。毛利官彦、図書館建築図案を齎らし来る。昆田文次郎、校紛ニ付来話。踵て増子喜一郎来話。午後一時、瀬川光行、堀田璋左右、書画大観ニ載せんため余の書画を一覧せんことをもとむ。朝来、取出」(四五ウ)し置ける幅若干を示し、

写真師をして撮影せしむ。此間、国府津高田より電話にて、今日天野往訪の模様を報す。其大略は天野、高田より当初君を新校規にて推すと云ひしを、今尚信し居り、理事を指名することに校規を定めたしと言ひ出せるニ対し、高田は今は今全く形勢変し、君を推さんとするも維持員の多数承知せず。又、理事指名も理ニ於て成りかたしと答ひ、その形勢の変化したる所以は君の幕僚か種々の事を為」(四六才)し、ために容易ならざる反動を起したるによることを詳説するや、天野の顔色看るく変し、座ニ堪へざるもの、如く倉皇辭し去りたりと云ふ。尚、高

田は今夕帰京を云々す。右の電話ニ依り、急ニ大隈総長ニ面会の必要を感じ、瀬川等を立去らしめ大隈邸ニ赴む。田中唯、塩沢も来会。侯ニ面し、余より詳細言説す。侯も既ニ決意あると覺しく、廿五日天野を招き辭職の勸告をなすべしと答へらる。二時間ニ涉り天野辭職後の事迄打合せて退出」(四六ウ)す。帰宅後、田中穂積と電話を交換す。校友佐藤孝三郎、名古屋市長就任ニ付挨拶状を寄せ来る。

二十四

晴。早朝高田を訪ふ。田中穂積、塩沢、田中唯も来会。校紛ニ付両三日来の事を協議す。結局余等連日会議の結果ニ変更なく、高田、大隈侯へ行く。帰宅後、坂口五峰来訪。置酒して話す。菊屋より高森碎巖画、九谷焼荒碗五客を購ふ。高田、総長を訪問の結果、」(四七才)今日午後、天野、総長の召喚を受く。辭職勸告のためなり。同時ニ評議員の内、早速整爾、昆田、増田も召喚さる。昨日、天野、高田訪問の後狼狽の状あり。加ふるに永井、昨日大隈侯ニ召されて厳叱を受け、旁々天野側大狼狽の様子

なり。会津八朔より自詠の句を書きたる五色の団扇を贈らる。二時過、大隈邸ニ到り天野召喚、侯より辭職勧告ありたる模様を聞く。侯の態度は極めて穩かなりし趣にて、天野は諾否を云はす帰りたる趣、偶々高田より電話にて、永井、高田訪問」(四七) 応対の模様を報す。曰く永井ニ対し勸声一番己れの辭表の理由を天下ニ公けにせは、天野は辭さざらんとするも能はざるべしと永井も漸く屈し、伊藤重次郎と共に天野ニ辭任を勧告すべしとて退きたりと。永井は飽迄づるき男也。漸く形勢の非なるを悟り、兩人責任を避けんための事と觀測さる。但し永井の言、勿論容易ニ信す可らず。

廿五日

晴。炎熱甚し。湯浅半月來話。坂口よ」(四八) り鮎の塩からを贈らる。浮田和民より來書。学校の紛議ニ付意見を陳べ来る。賀田直治妻一七日ニ付青松寺ニ到り、焼香終り直ニ辭してかへる。石塚三郎より着報あり。亡友田原栄次男英夫死去の報到る。一時より浮田、両田中、金子、坂本、塩沢、中島來会。愈々廿七日の維持員会ニ学

長解職決議を為すニ付、其段取と善後の案ニ付多時凝議の末、明朝、高田并ニ大隈総長を訪ふて、最後の事を報すること、廿七日朝、一同天野を訪ふて、情誼的辭職勧告を為すこと」(四八) 等を決し、四時皆去る。内子を田原方へ遣し見舞はしむ。晩間校紛ニ付昆田文次郎來話。其要略、今朝昆田は早速整爾、増田義一と共に大隈侯ニ招かれ長時間ニ涉り学校の閱歷を語られ、結局天野ニ対し辭職勧告をなすべしとの命あり。三人は命を奉して、天野ニ親交ある宮川鉄次郎をして侯の意を伝へ勧告せしむること、なり、昨今、鎌倉ニある天野を宮川并ニ三浦鉄太郎、今晚か明朝訪問の事となりたる由を語る。侯は廿七日迄回答を欲」(四九) すと三人ニ求められたりと云へば、議決を避けたき意あること推知し得べし。知らず、天野は此の侯の意にも従はず、尚、頑として私意を遂げんとする乎。夜に入り野口多内妻來り物を贈らる。

廿六日

晴。早朝、吉田恵三郎未亡人、関太郎、大江乙亥、川上邦基交々来る。八時、雜司ヶ谷斎場ニ到り、田原英夫の

葬式ニ臨み、同墓地ニある故柳城居士の墓を拝し、同志の会合しある高田邸ニ赴き種々打合の上、総長邸ニ到り」(四九ウ) 総長ニ面し、余主任にて明廿七日維持員会ニ於て、愈々学長解職の決議を為すの已むなきに到りたる次第を陳す。侯も遺憾なから是非ニ及ばすと、の返答あり。引続き種々の打合を為す。唯学長辞任後、何人を理事とし当分学長を闕き事ニ幹たらしむべきやニつき議論同志間ニ紛出し、各々責任を避く。依つて、已むなく余より一種変則の案を提出し、維持員中の七名を理事とすることに」(五〇オ) 漸く纏まりたり。其七名は浮田、塩沢、金子、坂本、中島、田中(穂積)、^{ツマ}阿部^{安部}なり。維持員中他の十一名はそれ〴〵局面ニ立つに故障あること衆の諒とする所なるにつき、斯く機宜の方法ニより纏めたる也。余より右協議の始末を侯ニ報し、侯の賛成を得、一同侯の食堂ニ於て午餐を共にし、天野ニ寄すへき辞職勧告書(本人所在不分明につき、書状を發すること、なれり)を浮田、塩沢担任にて起草し、之れを留守宅ニ致さしめたり。」(五一ウ) 大隈邸の協議、二時を過くるも尚尽きす。

余は石塚三郎の宅へ来りあるニより辞して帰宅す。真島桂次郎より來書。天野ニ辞職勧告を為さんとする昆田、早速、増田の三名、天野の所在不分明の爲め、明廿七日の決定を一兩日延期の要求あり。又、天野一派は評議員会を開らき一展開を策せんとし、愈々八月二日開会ニ決したる由報あり。余か顧問たる日本陶磁協会より日本陶磁器全書第一巻を發刊し、配本」(五一オ)を受く。田辺碧堂より來書。

二十七日

晴。会津八一、真島桂次郎、田辺碧堂外二、三家ニ書信を發す。三十一日、日石取締役田中次郎ニ招かる。会場築地精養軒也。増子、校紛ニ付來話。踵て田中唯一郎來話。河東田經清より近著横尾東作伝を贈らる。午餐後、大隈邸ニ抵る。維持員の外増田、早速、昆田も来る、増田外二人より高田ニ懇請し、今日の維持員の決定を延期せんことを」(五一ウ) 欲する動議ニ付高田幹旋。結局廿九日午後一時迄延期すること、なり、維持員会にては増子、中村(進午)、坂田貞一、三維持員の辞任を可決し、次

会を廿九日午後一時と決議す。今日天野出席せず。会場を大隈邸に接所とす。議事ニ先たち高田と大隈信常の間ニ小波瀾あり。余、調停漸く事なきを得たり。それかため増田、早速、昆田を会ニ召喚することになり、三人の希望三十一日迄延期を欲すると云ふにありしを、廿九日迄と脩正し、且三人の「(五二五) 斡旋は調停ニ落ること余一同を代表して条件とす。五時閉会後、金子同伴、坪内雄藏を訪ふて顛末を報告す。小沢隆一より葉巻煙草一函を贈らる。又、早川純三郎より埃及烟草壺箱を贈らる。夜に入り大隈家より天野より返答あり。侯爵の勸告ニ応し難き文意なる由、電話にて報あり。高田、其他と協議の上、明朝八時大隈邸ニ会合の申合を為す。」(五二六)

二十八日

朝来小雨、雨収まり冷氣を覚ふ。八時、昨夜の申合の如く大隈邸へ高田外八名の維持員(浮田旅行中欠席)会す。早速、増田、昆田の来会を求めて、侯の面前にて天野の回答ニ対し会議を開く。早速外二名は侯の囑ニ応し数日天野を捜したるも、終ニ所在不明にて面会を得ず。其間

先方より此の回答の来りたるを遺憾とする挨拶をなしたる後、斯る書面を創立者ニ寄せたる天野の心事」(五三〇)は非難ニ価するや論なきも、内情を知らざる者卒然三十五年の功労者を任期の残る一ヶ月許ニ容赦なく懲戒的処分を施すとありては、必らず同情寧ろ天野ニ集まらん。可相成任期の尽くる迄黙殺せよと三人より中裁的意見出で、侯はこれニ対し世間の思惑は左もあらんか、此の書面は全く余を侮蔑し、余を排除し去らんとする者にて、三十五年の友誼はこゝに断絶するものなりと意外の強硬の説出で、余のときは感」(五三三) 憤措く能はず。創立者侯の威信を保つは学校を保つ所以也。世間の思惑などに顧慮し侯の威信を軽んぜば、学校は亡滅せんと論じ、何分にも三人の軟論と調和の法なく、終ニ二十二時ニ至り食事後わざと侯の前を退き、更らに論議する所あり。三人は先づ退出し、他皆留まり長時間論議の末、結局余と田中穂積の硬論ニ決したり。即ち予定の通り明日の維持員会ニ於て、天野の学長を解職決議する事、来月」(五四〇) 二日天野側が開会して展開運動を試みんとする評議員会

を利用し、維持員会の議決を是認せしむるの運動を明日議決後、直ちに手分をして着手する事、地方評議員は大隈邸より電報を發し、會議の前日大隈邸へ召集、侯并ニ信常及余と田中穂積出席して仕末を報告する事等を協議の末、高田と余別席ニ侯ニ面して可否を質せしニ、侯も同意見にて此上は攻勢を取る方然るべしと」(五四) 答へられ、侯の二日輕井沢への出發も一日見合はさるゝ事となり、諸般の打合をなして、夕刻帰宅。大正六年度前半期分府税市税參円二十九錢、宅地租九円七十二錢納了。

二十九日

晴。十時頃激震あり。本日維持員会ニ於て、天野学長処分を為すの日也。早朝、昆田来り、今日の決議を延はす方法なきやと云ふ。余曰く、一法は今日之決議を八月二日過まで延はし、彼等か頼」(五五) みとする評議員会を受流すと共ニ、努力して天野の責任を問ふの多数者を作り、評議員会を逆用して、当方の味方たらしむること一策なりと答ふ。昆田、早速と相談せんと欲して去る。九時より両田中、浮田、阿部、塩沢、中島、金子、坂本続々

来り会す。坂本の曰く、定款ニ学長解職の明文なし、多少疑議ありと。三木武吉を招き説を聞く。三木は定款の欠陥は必らず天野側の乗する所となり、決議無効の訴訟沙汰たらん」(五五) と云ふ。論議中、早速、昆田來訪。頻りに今日の決議を見合はすべしと云ふ。定款不備の頓挫ニ衆の決心も緩み、論議の末結局余か今朝昆田ニ勧めたる説を取る事となり、一同余の宅ニ喫飯後、早速、昆田の兩人、大隈侯ニ同意を得んと欲し案を齎らし、先づ去り、余等も踵て大隈邸ニ抵り、侯父子ニ前頭の案を取るは、評議員を味方にする所以なることを云ふて、結局其事ニ決し、維持員会」(五六) を同邸ニ開らき、三十一日繼續開会を決議し、八月二日評議員会ニ対する懸引ニ付長時間打合、晚間帰宅。川上法励、小田島桂香来る。桂香ニ銅印代十二円交付す。夜ニ入りに在府津高田より電話来り、校紛解決法ニ付云々の申越あり。天野側より出たる記事四、五の新聞紙上、一昨日來統出す。

三十日

晴。昆田、田中唯、坂本來訪。昆田より昨日」(五六) 来、

早速、増田、浦部、山沢、渡辺亨と協議の次第を報告あり。昆田去るの後、田中、坂本と高田か国府津より申越したる案、即ち此際高田の学長として起つは却つて時局を紛糾せしむる虞れあり。然る可らずと協議中、国府津より電話にて再考の末、申越を取消す旨申し来る。菊屋ニ茶碗代七円払済。午後、金子、中島来訪ニ付、必要の報告をなし多少の打合を為して別る。国府津高田より再び電話来る。二時過、塩沢来訪、評議員上島長久、町田忠治を遊説」(五七)の結果を云々し、尚多少の打合をなして去る。国府津発高田の書状到る。電話にて既ニ解決後也。

三十一日

晴。葉山出先より浮田和民の書状到る。学長処分ニ付意見を陳し来る。井上辰九郎を訪ふて校紛の始末を告ぐ。井上は評議員会ニ出席せざる旨を答ふ。井上訪問中、国府津高田より電話にて、高田辞職之理由書を新聞紙ニ公表せよと申来る。奥田芳彦、図」(五七) 書館依頼の土佐絵写四枚持参。小久江成一、日清印刷の件ニ付長時間話

して去る。午後、高田、国府津より帰来。余の宅ニ立寄り、新聞紙ニ記事掲載の得失、来月二日評議員会ニ於て天野辞職勧告を決議する件等ニ付暫時打合の上、共ニ大隈邸ニ到り、田中穂、塩沢、金子、中島、田中唯と協議。早速整爾を招き評議員の天野ニ対する議決の方法等を協議す。偶々大阪より小川為次郎出京の報あり。侯の邸ニ迎へ余より一時間」(五八) 涉り校紛の仕末を話し、後共ニ侯ニ謁す。侯より又、長時間ニ渉る談あり。薄暮辞して、日本石油会社の取締役となりたる田中次郎の披露会(築地精養軒)ニ臨む。十時帰宅。下林貞雄より欣二又々不心得を始めた旨の細書あり。

校紛三十余日ニ涉り七月尽く。此間努力朝夜ニ繼ぐ。余の家を会場として同志十名の凝議せるのみにても十回ニ垂んとす。而して未だ決定ニ至らず。天野の狂暴は除名ニ値すと雖とも、世間事態」(五八) を弁せず。一概ニ峻烈手段ニ出つ可らざるは、所謂世間の思惑奈何を顧念するに在るのみ。自重又自重、屈服又屈服、隱忍又隱忍。三十余日間の経路未だ世

間ニ發表し得ざる所以は、校友評議員の斡旋ニ対し抑制已むを得ざるに依る。但し、これか為めに有識の評議員は皆な漸く総長の威信を保つ為め、天野を排すること已むを得すとの形勢ニ赴きつゝあり。觀し来れば内輪騷動ほど氣骨の折れてつまらぬものはあらじ。」(五九才)